国際基督教大学史(資)料――Ⅶ

ICUの回想

――新しい大学の建設 一九四九年―一九六六年――

モーリス・E・トロイヤー著

ICUの回想

——新しい大学の建設 一九四九年－一九六六年——

モーリス・E・トロイヤー著

Planning a New University in Japan 1949-1966

翻訳：

ICUの回想——新しい大学の建設

一九四九—一九六六年

A チャレンジ …… 5
B 日本へ—計画に着手 …… 10
C 米国での期待と責務、成果と危機 …… 26
D 再び日本へ—計画の推進 …… 39
E 米国に帰って—計画の推進 一九五〇—一九五一年 …… 46
F 日本での生活と体験 一九五一—一九六六年 …… 53
G 一般教育課程の策定 …… 65
H 四年制教養学部の開設と歩み …… 72
I 大学院課程の開設 …… 95
J 治癒と回避—成長期の苦しみ …… 96

K 日米関係について学ぶ—平和と武装放棄 …… 108
L 大学財政基盤の維持 …… 113
M 宗教生活と宗教活動の推進 …… 115
N ICU建設の努力は報われたか? …… 120
O 日本滞在最後の四年間 …… 127
P 追跡調査—卒業生のICU評価 …… 132
Q 大学教育における信頼の果す役割 …… 135
送別コンボケーションでの挨拶

（1960年撮影）

ICUの回想——新しい大学の建設　一九四九—一九六六年

A　チャレンジ

一九四八年十二月中旬、トーリー総長から、私に次のような話があった。クリスマス休暇後半の数日間、バックヒルズフォールズに話に来ないかという招待をラルフ・ディッフェンドーファ博士から受けるはずだが、ぜひ、承諾してほしいという。当時、ディッフェンドーファ博士は、日本国際基督教大学財団（JICUF）の会長の職にあり、トーリー総長は、同財団の教育顧問委員会の委員長を務めていた。

招きに応じて、バックヒルズフォールズに行ったものの、会談の目的のことついては、ほとんど見当がつかなかったが、総長を知る私には、何か重要な相談があるにちがいないということは推察できた。ディッフェンドーファ博士にお目にかかって、わかった事だが、博士は、オハイオ・ウェスレアンを卒業後、直ちにメソジスト派ミッション・ボードのスタッフとなった。そして、五〇年間、奉職されたあと退職し、現在は、JICUFの会長職にあるが、近く同財団の事

長すぎる？ 25年くらいだけ？

務局長を兼務させる予定であった。

この五〇年間に、博士は日本、次いで極東担当のフィールド セクレタリーを経て、同派ミッション・ボードの総主事を務められた。したがって、博士は、メソジストやその他の教団が後援する活動の目的や問題点に通暁しておられた。

日本や極東諸国では、旧帝国大学がエリートにふさわしい最もすぐれた高等教育機関とみなされ、学者ならば、これらの大学に教官として任用されること、学生ならば、入学することが、最も有能な学者や学生となる第一歩であり、第一の目標であった。

米国の教団の援助を受けた日本のキリスト教関係の大学は、このハンディキャップの下で苦労していた。台湾や韓国のキリスト教系の大学と異なり、日本のそれは、二流か三流の教育機関と考えられていた。

一八九〇年にはすでに、日本にも第一級のキリスト教主義の大学を設置すべきだという構想が生まれていた。この構想は、その後、六〇年間にわたり、たびたび、持ち上がった。一九三〇年代には、教育界、教会関係、ＹＭＣＡ、実業界の代表が結束し、このような教育機関の創設を提起している。一九三〇年代に日本に派遣された代表団は、この種の教育機関の設立を強く提言したが、当時は大恐慌の時期で、ミッション・ボードとしては資金的に手がまわりかねる状況にあった。

一九四五年の第二次世界大戦終結前、キリスト信者の学者グループが、この長年の夢を実現する計画に着手した。戦後日本に戻って来たミッション・ボードの局員たちは、すでにこのグループが活動しているのを知り、相携えて意欲的な活動を展開した。その後、三年の間に、日本と米国の双方で様々なプログラムが具体化し始めた。日本では、研究所によるセミナーが組織され、その法人化によって、日本の日本銀行総裁、一万田尚登氏の指揮の下に資金調達のキャンペーンが開始された。一九四八年には、このキャンペーンは大成果を挙げるにいたった。

一九四八年に、ヴァージニア州リッチモンドにあるギンター・パーク長老教会のジョン・Ａ・マックリーン牧師が説教をおこない、米国の教会は「山上の説教」の如き愚しいことを行なうべきこと、すなわち、かつての敵を赦し、愛せることを、日本における公共機関の設立に助力することによって示そうと呼びかけた。牧師が提案したのは、病院の建設だった。この構想は、ＡＰ通信を通じて全米に流された。ミッション・ボードの古くからの局員たちは、この時の熱心な反響を見て、積年の夢であった大学創設を実現する好機が到来したと考えた。全米教会連合協議会の会合で外国宣教連盟・（a Committee of Reference and Council of the Foreing Mission boards）が劇的ともいえる積極的な提言を行ない、この結果、日本における基督教大学新設事業に対する賛同と支持が得られた。

それまでにも、多くのミッション・ボードが日本向けの資金を蓄積していたが、第二次大戦中

は活用されないままになっていた。八派の教団からこれらの資金が拠出され、これが日本における新しい大学の開設と発展を支える財団の設立に結実した。この支援機関は米国とカナダの教育関係法令によって法人格を賦与された。これが日本国際基督教大学財団（ＪＩＣＵＦ）である。

一九四八年十二月にバックヒルフォールズでディッフェンドーファ博士にお会いしたときには、すでにこの新しい大学の設立計画が日本で進行していた。

米国の諸教団では、一一〇万ドルの資金を直ちにＪＩＣＵＦに拠出した上で、さらにこの大学の支援のため一〇〇〇万ドルの募金運動が計画されていた。しかしながら、この運動に着手するには、前もって決定しておかなければならないことが多々あった。なぜ新しい大学なのか？　既存のキリスト教系大学を利用して、その上に設置できる大学院ではどうか？　日本における国際基督教大学の主たる目標はどうあるべきか？

財団では、ディッフェンドーファ博士を日本に派遣して、これらの問題に答えを出すという決定を下していた。そこで博士は、同行者として教育関係のアドバイザーを探していたのである。トーリー総長は、アメリカン・カウンシル（American Council）に関与した経験と、さらにシラキュース大学での成績考査相談所長、全学自己調査所長としての経験を買ってと思われるが、この難事業に挑戦させるべく、私を博士に推奨したのである。

それまでにも、私は私なりに、われわれ米国人は第二次大戦の遂行に努めたと同様に戦後の平

和プロジェクトにも努力すべきだという考えを明らかにしていた。事実、一九四三年にさかのぼるが、私は、アメリカン・カウンシルの会長ズーク博士に書簡を送り、米国の教育、政治、実業、労働、各界の要職にある人たちを家族ぐるみ、一年間、日本、ドイツ、ソ連の同様の家族とを交換する予算を政府から引き出すため、そのワシントンでの影響力を貸していただきたいと申し入れたことがある。三ページにわたる書簡だったと記憶する。この手紙が関係あったかどうかはわからないが、私の提案に最も近いプランが、戦後のフルブライト世界学生教官交換計画である。この計画により、数ヵ国における戦時から平時に転用の数百万ドルもの資金が、外国から米国へ、米国から全世界へ、フルブライト教授とその家族の交換に活用された。この計画は、大学と大学院の学生にも適用された。私はその後、フルブライト上院議員にシラキュース大学で名誉博士号を授与する光栄に浴した。

私は、連邦教育庁から二件の要請を受けていた。教員養成プログラム研究集会のためのフィリピン行きと西ドイツ行きの二件である。何とか二週間割けないかという、たっての要請であったが、当時、手掛けていたプロジェクトを中断するのはとうてい、無理であった。ところが、一九四八年の十二月末になって、国際基督教大学新設計画を日本の学者と六週間にわたり協議するため五月にディッフェンドーファ博士に同行できないかという要請を受けたわけである。私のそれまでの経験と教育上の責任からすると、受けて立つべきチャレンジであったが、答えを出すのは

簡単でない。翌一九四九年には、シラキュース大学で成績考査相談所と全学自己調査の諸目的、プログラム、組織を一つのセンターにまとめ上げ、行政当局、ファカルティー、学生が、長所、短所を発見する自己分析の断続的なプロセスを実行し、急激に変容する世界で見通しをもって次のステップを踏み出せるよう協力するという仕事が待っている。この仕事は、米国の高等教育でそれまでにも手がけられた試みではあったが、規模としては最も総合的なものであった。

さらに、妻のビリーと私は、三世代ファミリーになるところであった。今回の日本行きは、プラン策定のために六週間を割けばよいだけだったが、計画の段階で深入りすることになった場合、計画の実施に関与すべき責任を回避するのは不本意であるし、適正を欠くことになる。

それにしても、この日本行きの要請については、答えは一つしかなさそうであった。この要請は、人生の様々な局面を新しいチャレンジに備えるべく生きてきた者にとって、天から下された一つの使命ともいうべきものであった。

B　日本へ——計画に着手

一九四九年五月一日、私はディッフェンドーファ博士に同行して、サンフランシスコでプレジデント・クリーブランド号に乗船、日本に向け出発した。博士と過した二週間の船旅は、大変興味深く、有益であった。海外に行った経験のない私にとっては、これがカルチャー・ショックのはじまりであった。私たちは、日本のクリスチャンの学者が三年に及ぶ協議の結果、作成した事業の目的、プラン、組織案に関する報告書や日本国際基督教大学財団の設置に至る各委員会の報告書を携行しており、私は博士と一緒にこれらの報告書を徹底的に研究して、様々なグループの、多岐にわたるが、重要な点では一致する考え方について理解を深めた。また、米国教育使節団が連合国最高司令部（ＳＣＡＰ）に提出した日本の教育に関する膨大な報告書もあった。ニューヨーク州教育委員会のジョージ・ストッダート博士が、この使節団の団長で、博士は新しい大学の構想が出ていることを承知していた。

ストッダート使節団の報告書を読んで、日本の教育が高度に組織化されていることを知った。かつては、小学校と中等学校のカリキュラムは、文部省が作成、制定していたという。教育の財政と管理は、高度に中央集権化している。地方ごとに教育委員会を設置するといった制度にはなっていない。

大学教育は高度に専門化している。日本語には、われわれのいう一般教育という用語がない。この報告書から知り、その後、在日フルブライト委員会在任中に確認したことだが、大学の専攻科目は七〇ないし八〇単位が必修となっていた。事実、日本の学部在学生が米国にきたとき、米

国のわれわれが理解できなかったことの一つに、これらの学生が狭い分野では米国の修士号を得た学生よりもむしろ進んでいるという点があった。と同時に、一般教育が欠けており、大学の学習でできるだけ幅広い関心を持つよう仕向けられることがないため、日本の学生は、重要な問題を広範で複雑な文脈の中で考える素地をほとんど持ち合せていなかった。

教育使節団の報告書では、大学が自然科学、社会科学、人文科学で各一二単位、合計三六単位を含む一般教育のための健全な基礎を確立するよう、強く勧告していた。専攻分野の意義を高めるためにこそ専攻外の分野にもっと目を向けるよう促したのである。このように、私たちの課題になりそうな事柄をあらかじめ検討した上で、一九四九年五月十三日に東京に到着した。

日本に到着して、最初に尋ねられたのは、米国で財団の資金集めが一、〇〇〇万ドルキャンペーンの達成に向けてどの程度、成果を挙げたか、という質問であった。この質問には、ちょっと困った。一万田氏を会長とする日本の募金委員会は、その五〇万ドルの目標に近づいているところだった。タンブリン・アンド・ブラウン社が組織するＪＩＣＵＦの資金調達機関が全米にわたるサンプリング調査を行なった結果、国際基督教大学プロジェクトに対して、ほぼ全米的な賛同が得られることが判明し、意気が上がった。次にわかったことは、各地域社会でキャンペーンを展開できる同窓生のない、草の根キャンペーンには問題がある、という点である。第三に、いくつかの主要な教派が多額の献金をＪＩＣＵＦに寄せてきたが、その献金に当り、財団に教会

チャンネルを通さずに資金調達をすること、という条件が付けられた。ということは、草の根レベルの非常に多くの牧師たちにとっては、教会とその信者が財団の資金調達キャンペーンにはほとんど関与しない、ということであったが、それはまったくＪＩＣＵＦの意図するところではなかった。私たちとしては、米国には、このプロジェクトに対し熱心な支持がある、と答えるのが精ぜいで、確たる約束はできなかった。ただ、事業の至当な目的と確実な計画を打ち出すことができれば、財団はいずれ当初の目標を達成できると確信していた。

日本訪問の初日、私たちは、一万田氏にお会いした。当時、日本銀行総裁であった氏は、国際基督教大学設立の構想が日本において進展し、海外から支援を受けているその目的と精神とを的確に把握されていた。そして、日本の銀行の支店網を通じて地域社会に至る恰好のパイプラインを持っておられ、支持者たちは各地の教会のリーダーの支持を得て、北は北海道から南は九州に至る日本の全土にわたり、戸別の募金運動を展開した。彼らは資金が集まるにつれて、目標達成の自信を深め、正式な後援団体を組織した。一万田氏は、戦争中、軍が所有していた施設の民間解放計画に通じていたので、三菱航空研究開発計画の一環となっていた三五〇エーカーのキャンパス用敷地の購入を手配された。

一万田氏との面談中、ディッフェンドーファ博士が氏に、あなたはクリスチャンかと尋ねた。「いいえ、私は仏教徒です」というのがその答えであった。そこでさらに博士が、「そのあなたが

日本における基督教大学の新設運動になぜこのようにご熱心なのですか？」と尋ねると、一万田氏はこう答えた。「私の娘がかつてミッションスクールに通っておりました。これが私の主な情報源なので、自分がキリスト教のなんたるかを知っているかどうか私にはわかりません。しかし、一九二三年の関東大震災の時、また、この度の悲惨な戦争の後も同じ気持でお国の方々が私共を助けに来て下さいましたが、その動機が何であれ、日本人にも、そのような行為が必要であると思ったからです。」

一万田氏はさらに話を進め、私たちが知らなかったあるエピソードを披露された。降伏文書調印後、占領軍が日本にやってきたとき、マッカーサー元帥が占領軍兵士に向けて宣言を発した。この宣言は日本語でも放送された。日本では各戸にラジオがあり、国民はこれに耳に傾けた。マッカーサー元帥が兵士に向けた宣言は、「これまでは、目には目、歯には歯の戦争であった。いまや戦争は終った。占領軍の精神は、山上の垂訓によって導かれなければならない。」という意味のものだった。

ところで、日本の国民が、この宣言を信じられるようになるには数か月を要した。日本の軍部から、米国軍が戦勝国として日本にやって来たら日本を蹂躙するに決まっていると教えられていたからである。ところが、占領軍は、日本国民が自立できるようになるまで工場や学校病院の再建に力を貸し、食料を提供することを約束したのである。以上のことが、日本における私の教育

体験の重要な第一歩であった。

日本での最初の夜、ディッフェンドーファ博士と私は、セミナーを講じている日本のキリスト教徒学者と会った。これらの学者が構想した目的は、米国で考えられていた目的と似通っていた。しかし、彼らからセミナーのプログラムの説明を受けて明瞭になってきたのは、この人たちが心に描いているのは、日本の旧帝国大学にならった第一級の教育機関だということであった。つまり、日本では旧来、研究領域は多数の講座から成り、その講座を師たる教授が占め、この教授がそのかつての教え子数名を率いて狭い学問領域の学科を形成している。教育の過程で、学生は師たる教授にぴったり身を寄せ、その影を歩み、師が考え、学んだ通りに考え、学ぶように努めるという傾向になる。学生は、一般に師の影の外に出たり、師を乗り越えて先に伸びていくことを歓迎されない。このことは、ストッダート使節団の報告書にも明記されていたが、私たちとしては真摯なキリスト教学者に面と向って、あなたがたのプランは適切でないとは言えなかった。私たちは、既存するいくつかの主要キリスト教関係大学の上部構造として大学院を展開する可能性についてクリスチャンの学者と徹底的に討論すること、また学長には何としても日本人の学者であり、リーダーである人を選任しなければならないこと、という二項目以外にはＪＩＣＵＦから何の指示も受けていなかった。

この第一回の会合が終わるまでに、三つの問題が繰り返し論ぜられた。第一に、なぜ新しい大

学なのか？　第二に、もし新しい大学でなければならないとして、日本に既存する二四のキリスト教系大学との関係はどうあるべきか？　第三に、新しい大学が展開すべき独自のプログラムは、日本のどのような要求に応えていくべきか？　以上の点を論議した結果、次のようなことが決まった。すなわち、日本キリスト教徒学者委員会（Japanese Christian Scholars Committe）の山本忠興博士、矢野貫城博士、クリーテ博士、それに、ディッフェンドーファ博士と私の五名が四年制のキリスト教関係大学一三校、早稲田大学、慶応大学、京都大学、東京大学との間でこの三点について話し合う、という決定である。

いずれの大学でも、第二の問題点については、二つの即答が得られた。既存校複数の上部構造として単一の大学院を設立することはできない。そのような総合的な大学院は文部省の規定により許されない、という回答である。第一の質問に対しては、やはり、新しい大学でなければならない、なぜなら、既存の大学では、過去のやり方を、おおよそ、踏襲する形で学生の教育を進める傾向が出てくるであろうし、これでは教育に対する新しい要求に適合しない、という点が力説された。

第三の質問「新大学の責務と中心課題はどうあるべきか？」に対する回答は、ほぼ一致したもので、事実、第一と第二の問題に対する答えが、これでさらに、はっきりしたし、この新しい大学は、既存校の手本となり得る一般教育のプログラムを、より自由に展開できると思われた。日

本の新憲法では、教育制度の中央集権排除を定め、地方教育委員会の設置を命じ、現場の教師や地方の教育行政者にカリキュラム作成の責任を課している。この新しい大学では、こうした新しい責務の遂行を助勢すべき教員養成の学部プログラムを策定し、さらに、新憲法の下で認められた地方レベルでの教育のリーダーシップを確保するために、カリキュラム作成と教育行政を専攻する大学院を開設すべきであるとされていたからである。

新憲法ではまた、実業界や行政の場における新しいタイプのリーダーシップの確立を求めていた。旧来の日本の体制では、行政を目標とする者の養成は、法学部を通じて行なわれてきたので、行政上の諸問題に対するアプローチは、法の範囲内でしか許されていなかったが、新憲法下では、歴史、政治学、経済学、社会学などを通じて、行政にアプローチする人たちにも機会を提供するようになった。法を国民の主人としてでなく、下僕とみなし、必要性という見地から行政上の諸問題にアプローチすることが求められたのである。相次ぐ会合の中で強調されたのは、既存の大学が新しい体制よりは、むしろ、旧体制のための学生を養成する傾向が強いことであった。したがって、新しい大学は、新しい展望と任務を切り拓くモデル校になり得ると考えられた。また、大学院課程は、教養学部によって支えられるべきだというほぼ全会一致の提言も行なわれた。

各大学との会合を終えたあと、委員会は連日、クリーテ博士の自宅でミーティングを行なった。委員会は陣容を強化し、長年、ＹＭＣＡの事務局長を務めておられた斉藤惣一氏と法律家で

明治大学の前総長、鵜沢総明博士を委員を加えた。鵜沢博士は法哲学の著作を出版されたところであった。

その後の会合を経て、目的が明確になり、この目的は国際基督教大学という名称そのものに示されることになった。また、この大学には、一般教育と広範な専攻学科を重視する教養学部を置くことにした。専攻学科は、社会科学科、人文科学科、自然科学科、（数学も含む）を設置し、さらに、第四の専攻学科として、語学科を追加した。人文科学科には、教職課程を置く。最初に教養学部を設けるのは、十分な学部課程が軌道に乗るまでは、大学院設置が認可されないと予想されたからである。行政学と教育学の大学院課程は、教養学部の最初の卒業生が出た時点でスタートするように計画した。

これらの目標と実際のプログラムを心に描いて、私たちは大学の諸目的に奉仕するＩＣＵの憲法（基本方針）の作成に取りかかり、まず理事会の構成と任務を定めた。理事会は、教育、医学、法律、実業、工業、宗教各界のリーダーをもって構成することとする。外国人を理事会のメンバーに招聘してもよいが、外国人が過半数を占めるようなことは絶対ないようにする。日本に設けられた米国の大学ではなく、海外からの協力と支援を得て設立される日本の大学、というのが本来の姿だからである。憲法には、日本の法令の定めるところに従い、理事会の員数の二・五倍の定員（理事も含む）を擁する評議員会の設置が定められた。また、既存の四年制キリスト教系

大学の学長を評議員会のメンバーとすることも定められた。

大学の役員は、学長および複数で同格の副学長とする。後者は、当時、米国でもそうであったように、日本では革新的な制度であった。日本の大学では（米国もそうだが）、政策の決定の場において、大学の財務担当の長が、学長と、各種の職務を担当する他の役員との中間に立っている。日本に発つ前に私が米国で最後に会ったのは、ストッダート訪日教育使節団のメンバーの一人であった。この人が言うには、新設の大学には、できれば、教育プログラムや財務政策の形成に学長と共に関与する同格で複数の副学長を置くべきであるという。この提案は、新大学の憲法に盛り込まれることとなった。

このように新しい大学の憲法案を起草した後、委員会は理事候補と評議員候補のリスト作成に取りかかった。この頃、クリーテ博士の自宅で委員会を終えてホテルに帰る道すがら、私はディッフェンドーファ博士に「理事会のメンバーに推されている人たちの平均年齢は何歳位でしょう？」と、尋ねてみた。大勢の候補者と知己である博士が算定されたところ、その結果はいささか意外であった。そこで、その翌日の委員会でこの件を取り上げた。平均年齢は何と七二歳だったのである。望ましいとみられる理事会の人員構成、年齢配分、および女性の起用についてかなりの議論を行なった。その結果として、理事会に数人の女性を起用し、三〇歳代前半のメンバーも数人含めることになったのである。

理事会と評議員会の日本人メンバーの顔ぶれは大変、印象的であった。すぐれた実業界のリーダー、教会関係者、教育家、現職と前職の閣僚と国会議員、それに元駐米大使などの名前があった。米国とカナダ側からのメンバーは、教会リーダー、教育家、米国務省外務職員などであった。

秩父宮妃殿下と一万田日銀総裁が名誉評議員になることを承諾された。これは、皇族が日本でキリスト教と銘打った事業に公式に関与された初めての出来事である。

理事会と評議員会の候補者にリストアップされた人たちが一九四九年六月十三―十六日、御殿場近くのＹＭＣＡ会議センター東山荘に招かれた。この四日間に憲法案が一語一句、検討され、六月十五日に最終的に承諾されるに至った。これで現実の国際基督教大学の歴史の第一歩が印された。残った時間には、憲法の条項を履行する作業が行なわれた。新しく発足した正式の理事会では、諮問委員会の進言を容れて、湯浅八郎博士を初代の学長に、また元神戸女学院大学財務担当のハロルド・Ｗ・ハケット博士を学務担当の副学長に招聘することを決議した。

日本の有力な英字紙「ニッポン・タイムス」（現在の「ジャパン・タイムス」）の社長、東ケ崎潔氏が理事会議長（理事長）に、基督教教育同盟会の名誉事務局長カール・ダニエル・クリーテ博士が副理事長に、早稲田大学名誉教授で電子工学の権威、山本忠興博士が評議員会の議長に、カナダ合同教会のハワード・Ｗ・アウターブリッジ博士が理事兼任で評議員会副議長に、それぞれ選任された。

国際基督教大学の最初の課程は、一九五一年四月（日本の学年度初め）に運営を開始することが決定された。

当時、湯浅博士は同志社大学の学長であった。博士は、カンザス州立大学から昆虫学の博士号を授与され、戦前も学長として同志社大学と長年、深く関わりを持っていたが、間もなく軍の圧力で学長を辞任した。戦争中はインドのマドラスで開催された世界教会協議会の会議について報告するため訪米団に加わり、ルース・シーベリーの世話で米国に留ることができた。そして、戦後、再び、同志社大学の学長に就任した。

そこで、湯浅博士の招聘については、同志社大学の理事会に採り上げてもらい、その学長辞任受諾を得る必要があった。だが、そのために同志社大学に出かける前に、天皇陛下に拝謁し、この大学のプランについてご説明申し上げることとなった。会見の場に案内される前に、謁見終りという段になった際に、陛下の後ろに控えている侍従からその旨、合図があると聞かされた。私たちが新しい大学を創設するについての私たちの使命とこれまでの経過についてご説明申し上げると、両陛下は非常な興味を示された。拝謁の時間は三〇分程度だろうと聞かされていたが、終了の合図があったのは、一時間後だった。

その日の午前中にはマッカーサー元帥と会見した。この会談は、日本でＹＭＣＡのリーダーを長く務められたラッセル・ダーギン氏のはからいで実現した。なお、ここでひとこと、言及した

いことがある。マッカーサー元帥は、戦後、日本に進駐したとき、日本の指導者たちに、「日本人から信頼を受けている在日米国人は誰か？」と尋ねた際に、ラッセル・ダーギン氏の名がたびたび、出てきたという。ダーギン氏は、マッカーサー元帥の執務室近くに事務所を構えていた。

日本滞在の六週間、ディッフェンドーファ博士と私は、当時、米国の民間人や軍関係者の本部となっていた帝国ホテルに宿泊していた。マッカーサー元帥との会見が決まったとき、会見は二〇分で終り、元帥が専ら話をするのではないかと予想していた。ホテルの内外で耳にした元帥評は両極端に分かれ、中間がなかった。一方は、主に文官のそれで、元帥は日本人に対して命令的過ぎると言い、他方は武官の元帥評であり、もっと命令的であって、いいと言う。その際の私たちの体験では次のようであった。

元帥は、新しい国際基督教大学の前段階であるクリスチャンの学者によるゼミナールについても、また米国におけるＪＩＣＵＦの設立についても知っておられ、私たちの報告や日本の協同作業に関心を示された。私たちは、日本側委員会や、日本の各キリスト教系大学、帝国大学数校との協議を通じて大学創設事業の目的や焦点がどのように明確になってきたかについて説明した。さらに、今後のプランを報告し、どのように理事会と評議員会の選出を行なったか、また理事や評議員がいかに日本の指導者層を全面的に代表するものであるかについて説明した。

ディッフェンドーファ博士が理事会で学長を選任した旨、報告すると、マッカーサー元帥は、

「日本人だといいのだが」と発言した。これに対して博士が「日本人ですよ」と答え、次いで元帥が、「どなたですか？」と尋ねた。その時、博士は、「その方は現在あるキリスト教系大学の学長なので、公表する前にその大学の理事会の承諾が必要なのです」と答えた。そして、私に「元帥は秘密を守れるかな？」と言ってから、元帥に同志社大学の湯浅八郎博士の名を告げた。このちょっとした当意即妙のやりとりが、その場の雰囲気をすっかり打ち解けたものにした。そこから先は、この両巨人、ディッフェンドーファ博士と元帥は、実に和気あいあいとしたひとときを過ごした。

元帥が、「日本人を学長に選ばれたのは大変結構なことです。日本にいて重要な案件を実施する際には、われわれはそれに最も適した日本人を徹底的に探し出し、彼にできる限りの手助けをする、というやり方をとってます。」と述べたことから、その後、さらに三〇分間にわたってマッカーサー元帥との非常に興味深い話し合いが続いた。

元帥からこんな話を聞かされた。占領軍が日本に進駐したとき、日本の新聞の論説はすべて発行前に検閲することとした。この措置を数か月間、実施したところで、元帥はこの検閲に関与していたスタッフを召集して、次のように指示した。日本の主な新聞の編集責任者を集めて、今後、論説は事前には検閲しないが、必要とあれば、発刊後に検閲する旨、伝達するということを、高度に組織的で命令的な統治に慣れ切った日本人が民主化の道を進めていく課程で、われわれが彼

らとの関係を変えていく一例として、元帥はその話をされたのである。

元帥は、以下のような驚くべき話も聞かせて下さった。共産主義者が数万人規模で農民を組織しているという情報が元帥にもたらされ、それは、農地の九〇％を、農民の一〇％に過ぎない地主が所有しているためだという。つまり、農民の九〇％は、地主からの命令で働き、農産物のかなりの部分を地主に差し出すので、生活にも事欠く状況だったのである。

農民の間に見られるこうした大衆運動の発生にかんがみて、元帥は、首相ならびに農相と事態について検討し、二人に対して、抜本的な土地改革を行なうよう強く勧告した。その結果、農地改革法が国会を通過し、私の記憶では、保有面積限度は三・五エーカーに抑えられた。日本がカリフォルニア州より小さな土地に米国の半数の人口をかかえていることを考えると、この農地規模は一定の合理的根拠を持っていた。農地法ではまた、各地方自治体が同法に基づく農地の再配分を実施するための委員会を選任するよう規定していた。各三名の委員から成る一〇〇〇単位の農地委員会が設置された時点で、委員に選任された共産主義者は五、六人しかいなかった。農地改革法が実施されるに従って共産主義は、農民の間から消えていった。農民は、県の農業研究センターから指示や助力を受け、収穫はすべて自分のものとなった。

一般の人は、マッカーサー元帥に対して、非常に保守的な個人主義者のイメージを抱いていたが、元帥は、日本の共産主義を抑えるには何をなすべきかを知り、その実行に独自の役割を果たしたのであった。一人の将軍、一人の軍人が非軍事的な手段を用いて共産主義の進出を抑えた例がこの農地改革である。この改革は修正資本主義であった。すなわち、農地は、規模は小さくとも農民のものとなった。共産主義体制下だった場合には、農地は集団農場に統合され、国家に帰属することになったであろう。ここに、人口の多くが貧困状態にある国々において、われわれが国の政策を評価する上で参考になる教訓がある。共産主義者の進出そのものを力で抑えるのではなく、貧困問題の解決に力を貸すべきである、という教訓である。ついでながら、一九六六年に私達が日本を離れる頃には、日本の農民は米を輸出するまでになっていた。

元帥と会見してから数日後に、ディッフェンドーファ博士と私は、同志社大学の理事会との会合のため京都に赴いた。同理事会では私たちと湯浅博士の懇情を容れて、博士の学長辞任承諾を決議した。湯浅博士は、その後一年半をかけて創設されるにいたった新大学、ＩＣＵの学長に就任することとなった。

計画が完了したこの段階で、ディッフェンドーファ博士と私は、財団に報告するため帰国した。

C　米国での期待と責務、成果と危機

一九四九年七月二四日、二五日の両日、ディッフェンドーファ博士と私は、ニューヨークで財団に帰国報告を行なった。クリスチャンの学者ゼミナールやキリスト教系大学のリーダーとの会議の結果、例の三件の質問に対する回答が得られたことについて説明した。さらに、理事会および評議員会設置の経過について、また、御殿場で理事会と評議員会が教育計画案と大学の組織案を承認、可決したことを説明した。

教養学部、ファカルティーと大学行政職員の養成、新憲法下での新しい任務に応える公僕の養成が、どうしても必要であることが明らかとなり、財団はようやく、始動中の一、〇〇〇万ドルキャンペーンを正当化できる目標を持つことになった。ＩＣＵの設立計画に対する強い要望と熱意は、日米関係に経験と重責を持つ公人たちが述べた以下の引用文の中にはっきりと読みとれる。ＩＣＵは、その構想を産み出したクリスチャンの学者やミッション・ボードのリーダーたちの枠を越えて、広汎な人々の期待を担うに至ったのである。

国務省（ワシントンＤＣ）

ラルフ・Ｅ・ディッフェンドーファ博士とジョン・コヴェントリー・スミス博士の指導の下、日本に国際基督教大学を設立するためニューヨークの財団が現在、手がけているプロジェクトにご注目願いたい。元国務次官ジョセフ・Ｃ・グルー氏は、この事業のため、わが米国とカナダで資金を調達するキャンペーンの全米委員会を引き受けておられる。

これは大変、すばらしいプロジェクトであると思う。このような性格を持つ大学は、教育面で、そして、日本における民主主義の進展に建設的貢献をなすことができる。

米国とカナダの多くの著名人がこのプロジェクトを支持している。この大学は必ずや、日本の将来に重要な役割を果たすであろうし、このプロジェクトは、日本のためだけでなく、米国の国益に適ったプロジェクトとして、米国民の承諾と支持を受けるに値するものと思う。

ディーン・Ｇ・アチソン

連合国最高司令官（東京）

この基督教大学の建設は、米国と他の国々が人道的立場に立つ将来の日本のリーダーを創り出

すためになし得る最も重要な事柄の一つである。

自由に重きを置いた精神的な基盤があって初めて日本における民主主義の永続性は保存される。かかる精神的基盤こそが、人間の尊厳を要求し、また、万人に君臨する創造主としての全能の神を信じるものだからである。

日本は、民主主義を達成するには精神性と道徳的リーダーシップを力強く求めていかねばならない。日本が将来の世界秩序の中で前進しようとするならば、個人の価値と倫理的行為を重んずる宗教が不可欠である。

キリスト教教会は、過去五〇〇年の間に、いずこの地、いずれの時代にも先例のなかったような好機に、今日の日本において遭遇している。しかも、ここで試されているのは教会だけではない。西洋文明が有する民主主義の理念全体が同様に試されているのである。

この新しい大学は、キリスト教と教育を独自の方法で結び合わせたところにその特長があり、日本の将来において、必ずや重要欠くべからざる役割を果たすであろう。この大学は、その崇高な理想の故に万人の支持を受けるに値する。

ダグラス・マッカーサー

ワシントン

高い道徳律を伴ったキリスト教の原理と規範と倫理は、真の民主主義体制の建設に資し、民主

主義の成功のために欠くことができない。民主主義の基本的な価値は、民主主義の諸問題への宗教的なとりくみによって強化される中で高められていく。このような背景を得て、真の民主主義は生命を保ち、成長していくのである。

日本における国際基督教大学の設立を促し、鼓吹したのがこの考えである。大学は、教派に属しない。高度の学問、キリスト教の規範、原理、原則が、この大学の教え授けようとする民主主義の根源的基盤として絶えず銘記されるように、というのがその意図である。

特定の教派に帰属させようとか、キリスト教に改宗させようとかいった試みはなされるべくもない。このような試みは、われわれが考える民主主義の理念に反することになろう。信教の自由は、様々な自由の中でも最も重要な自由の一つである。模索する魂に対してキリスト教が真の解答であることを認識するに至った学生は、自分の求めるものに充分かつ満足すべき答えを見つけられるであろう。だが、この解答に到達するには、自らの主体性と努力はもとより、自分を取り巻くキリスト教的な環境の手助けが必要である。約言すれば、これがこの大学を導く方針である。

この設立事業に対して、一億五、〇〇〇万円を寄付された日本の方々(その九五%はキリスト教徒でない)の熱意のこもった賛同と支持は、われわれに示された心強くも心暖まる行為である。米国とカナダでは、二年間に一、〇〇〇万ドルを調達する計画を実施に移しているところで

ある。私はこの大学の建設的な潜在能力を自ら強く確信するが故に、全米募金委員長の役をお引受けした。私はこの事業が日本の利益だけでなく、米国とカナダの国益にもきわめて重要なものになると信じ、この事業はその崇高な目的の故に万人の支持に値する、というマッカーサー元帥のお考えに心から共感するものである。

元（戦前）駐日大使　ジョゼフ　C・グルー

文部省（日本政府）

わが国に国際基督教大学を設立する計画は、日本国民から真剣かつ広範な賛同を得ている。いうまでもなく、私は文部大臣として、この事業の広範囲に及ぶ重要性を高く評価するものである。この大学が民主主義の理想と世界平和に貢献する有能なリーダーを育成することにより、日本の民主化と教育の興隆に絶大な役割を果すものと確信する。米国国民がこの計画に示されているあたたかい好意的な関心に、日本の官民こぞって深く感謝するのはまことに当然であり、かかる好意は貴国国民の、国境を越えた偉大な人道的精神を象徴するものである。このようにして設立される大学こそ、わが国民を鼓舞激励する存在となるであろう。

この大学が民主的で平和を愛する国民の成熟と世界平和の大義を推進することにより、歴史的な役割を果すことを確信する次第である。

文部大臣　高瀬壮太郎

新しい日本は男女を問わず、新しい日本人を必要とする。これらの新しい男女は、新しい教育によってのみ創り出すことができる。ＩＣＵはこの新しい教育を体現する大学であり、独自の理念と理想を有する。その構成において非常に国際的であり、その共同体としての雰囲気において多文化的であり、その普遍的な人的結合において多人種的であり、そして、原理と実践において断じてキリスト教的である。ＩＣＵは、重要な歴史的役割を担い、国民的要望に沿った大学とならなければならない。高度の知的、人道主義的水準を保つ教育プログラムと教育機関としての任務遂行を通じて、ＩＣＵは、日本国民の全面的な再生と日本国の政治的、社会的変革の完遂に、決然として寄与したいと考えている。

湯浅八郎

学長からの個人的なメッセージ

戦後の廃虚の中から平和と民主主義の新しい日本が立ち上がるために、国際基督教大学の有する歴史的な意義と革命的な重要性は大きい。このことを心から認識して、私は謙虚に、断固として、そして、祈りを込めてこの大役をお引受けした。

いうまでもなく、一人の人間の力では大学は創り出せない。私は、キリストの教えを信じる全世界の同志がたゆまず掲げている人類の連帯と教育の可能性に対する生ける信念のシンボル以外の何物でもない。これら同志の忠実な支持と変らぬ献身に支えられ、神の祝福を得て、国際基督

教大学は、世界史のこの重要な転機において、その重大な使命を必ずや達成するだろう。

湯浅八郎

注＊　以上の引用文は、『国際基督教大学創立史―明日の大学へのヴィジョン（一九四五―六三年）』（チャールズ　W　アイグルハート著　一九九〇年、ICU刊）による。

日本と米国、カナダの一般市民や指導者層からICUに対して待望の声が寄せられ、ICUの設立と維持に必要とされる一、〇〇〇万ドルの資金調達はもはや取り消しのきかない責任としてJICUFに課せられた。そして、また、これは、湯浅学長とハケット副学長、そして、私に課せられた重大な、逃られない責務でもあった。

この資金を集めるには、教会の草の根レベルで確信をもって、この事業のために弁じてくれる人たちが必要であることはわかっていた。頼るべき同級生はもちろんいない。だが、資金調達機関のタンブリン・アンド・ブラウン社に、とにかく歩を進めて、何ができるかを見きわめてもらうことにした。バージニア州のリッチモンド、テネシー州のメンフィス、シラキュースなどの成果は心強いものがあった。私は、エドウィン・ダールバーグ師の招きにより、シラキュースのバプチスト教会でICU設立のプランについて報告を行なった。私の報告の後、ダールバーグ牧師は会衆に、「私たちは戦後の再建のための分担金拠出を成し遂げたところですが、今ここに、もうあと一歩前進してもらえないかという呼びかけがきたのです」と話された。ここでの募金は、申

し込みも含めて一、四〇〇ドルに達した。シラキュースの教会ではキャンパスの教授宅用の資金を拠出した。そして、パーク・セントラルは、一六年間にわたり長老派ボードを通じて支援を寄せてくれた。しかし、個々の教会からの募金状況は、全体として甚だ、かんばしくなかった。それでも、各教派が財団に拠出した一一〇万ドルの資金と入金した募金をもとに、一九五〇年一月、ハケット氏が日本に行き、本館用建物の改造と完成について湯浅学長、理事会、建築家と打ち合せを行なった。

日本での募金で購入した敷地には、中島飛行機が航空研究所として建設した建物があった。フットボール競技場のゴールポスト間にも匹敵する長さの二階建てで階段と手洗いが両端と中間にある鉄筋コンクリート造りの建物である。この建物は、未完成のままであった。床は仕上げが施されていなかった。間仕切りもない。各階の中心部分にはコンクリートの柱列が（列と列の間約一〇フィートの間隔）通しで立っている。柱列の中の柱と柱の間隔は約二〇フィート、柱は壁から二七フィート離れている。ということは、仕切り壁を柱と外壁を結んで設ければ、二〇×二七のユニットを二、三室つなげて大きな教室を作れる。結局、この二〇×二七フィートの仕切りユニットは、セクレタリー室、保管スペース、教授のオフィス三室に利用した。こうして、大学の開設時の施設として、この建物の完成計画が進められた。

一九五〇年初め、一、〇〇〇万ドルの募金運動は目標額をはるかに下回りそうな情勢がはっき

りした。湯浅学長、ハケット副学長、建築家のヴォーリズ氏も来米され、ＩＣＵ設立の根拠と資金が緊急に必要なことを、しばしば、説明して、キャンペーンを応援された。この本館が完成すれば教養学部の授業、行政業務、図書館を取りあえず満足すべき状態で開始することができる。したがって、米国からの援助に期待がかかっていたのである。しかるべき建物は目の前にあるのに、計画を支える援助がまだまだ足りなかった。これでは、米国の教会に対する日本の信頼が悲劇的な結果になりかねない。

ディッフェンドーファ博士は、湯浅博士、ハケット氏、私の助力を得て、これらの訴えを各教派に持ち込むことにした。そして、ハケット氏、湯浅博士、私の三人は、五ヵ年予算作成の作業に取りかかった。一年間はまず語学研修所と称するプログラムを中心に進め、その後、四年制の教養学部を開くというものである。この予算案により、開設当初、五ヵ年間の各年度に米国からの必要な維持費、建設費が確定した。この必要額について各教派の理解を得るための方策が講じられた。ディッフェンドーファ博士は、この任務に邁進された。

ディッフェンドーファ博士、湯浅博士、私の三人が本館用のドアの金具について契約するためイエール・ロック社の代表とプリンス・ジョージ・ホテルで会ったのは、これらの教派の一つと会合をもった後のことであった。私たちは昼食後、クレンパー・ビルに戻り、私は二人と別れて汽車でアトランティック・シティーに向った。ＩＣＵ副学長として、長老派ミッション・ボード

の指名と支持を受ける資格について、同派ボードの役員たちと話合うためである。アトランティック・シティーに到着してホテルに行くと、その会合のメンバーが、ディッフェンドーファ博士が九階のオフィスに戻るエレベーターの中で亡くなられたことを伝えてくれた。博士は、その勇気ある信念と任務に全力を傾け、最後のエネルギーをも注ぎ込まれたのであった。博士は人々から永く慕われる巨人であった。

この時点で最も心配されたのは、ディッフェンドーファ博士の死が、ＩＣＵと財団の将来にどのような影響を及ぼすか、ということであった。

なお、ここで以下のことを述べておきたい。私は指名委員会から、長老派のミッション・ボードの下で副学長就任資格の要件を満たすために、聖職拝命を受ける意志があるかどうか、その夜、尋ねられた。私は心理学の博士号を有しているが、牧師としての教育は受けていないので、聖職拝命は受けるべきでないというのが私の考えであった。私が聖職を拝受すれば、ボードが義務づける神学教育をおとしめることになる。だが、ボードが私の経験をもってよしとするならば、喜んで日本派遣のクリスチャンの教育者として任命していただきたい、と伝えた。そして、この条件はボードの受け入れるところとなった。

ＩＣＵは、多くの教派では明らかにディッフェンドーファ・プロジェクトとみなされていた。したがって、博士が亡くなった当時、ＩＣＵプロジェクトと日本国際基督教大学財団は消滅した

と見る教派があったのは理解に難くない。しかしながら、このプロジェクトの精神と将来性を明確に把握し、あらゆる努力を払ってプロジェクトを生かし続けようと考えたリーダーが、教派やミッション・ボードの中に大勢いた。その一人が長老派ボードの主事、故ジョン・コヴェントリー・スミス博士である。このプロジェクトを生かし、発展させるべきだという博士の決意は、ディッフェンドーファ博士のそれに匹敵するものであった。スミス博士は私と同年齢であった。第二次大戦前、日本に宣教師として何年か滞在した経験がある。日本語を自在に操り、日本文化のすぐれた理解者であった。日本文化とキリスト教との類似点と矛盾する点についても熟知されていた。

スミス博士は日本の教会の独立をうながした主なリーダーの一人でもあった。日本の教会を米国の教会の延長的存在のまま置いておくのではなく、リーダーシップを日本人キリスト教徒に委譲するというのがこの運動の意図するものだった。そして、長老派所属の宣教師が友愛的な運動家として再評価されたのは、この独立化運動に携わる過程であった。スミス博士は第二次大戦開戦後まもなく、日本に抑留され、その後、グリプスホーム号で本国に送還されたのち、大戦中はピッツバーグの長老派教会の牧師を務めたが、戦後、直ちに、長老派伝道計画の極東担当事務長に就任した。国際基督教大学設立の発案と財団の設立において、スミス博士がディッフェンドーファ博士と共に有力な指導者となったのは、以上のような経緯があったからである。スミス博士

は、長老派ミッション・ボードの事務局長を退任後、七年間にわたって、引き続き財団の理事と実行委員長を務められた。

ミス・ルース・ミラーは、ディッフェンドーファ博士の秘書であった。博士の死後も引き続き約三〇年間、事務長として、また最後には財団の常任理事として財団のために献身し、想像力豊かな仕事を成し遂げられた。ミス・ミラーは事務長として初期の頃、国際基督教大学の奨学制度のための募金キャンペーンを組織した。このキャンペーンは、米国の教会関連の大学のキャンパスにおいて、学生や教員の間で展開され、財団の全般的なキャンペーンの進歩が思わしくないところを補って力があった。ミス・ミラーは、財団の付属機関である婦人委員会の設置に力を尽くした。この委員会は、この大学が、必要とするものを最初から認め、時には特に必要な教員を海外から招聘するため、時には図書館のため、そして、寄宿舎の助成のための募金プロジェクトを取り上げた。

ミス・ミラーは、また、大学を支援する男子企画委員会の設置にも大いに助力した。財団の運営と基本財産に一、〇〇〇ドル以上の寄付をした男性がメンバーとなる委員会である。特別プロジェクトの他に、この二つの補助機関は、各ミッション・ボードのＩＣＵへの関心を維持するのに役立った。ミス・ミラーは一九八四年に引退した。財団と大学は、それまでの彼女の誠実で、創造的な仕事に対する感謝の気持ちを、いつまでも忘れないであろう。

ディッフェンドーファ博士が亡くなって間もなく、私は財団において暫定的に博士の代行を務めるよう求められ、財団では直ちに、後任探しを始めた。その結果、スタンレー・ステューバー博士が選ばれた。教派間や国際的な諸機関の間の広報業務にすぐれた実績を挙げた方である。ちょうど広報関係の著書を上梓されたところであったが、都合でその後、数か月間は財団に参画できなかった。その間、私は財団の仕事でシラキュースからニューヨークに通いながら、シラキュースでは大学院のセミナー二クラスの指導を続けた。

キャンパスと本館を準備するプランが日本で進展するにつれ、湯浅博士とハケット氏が米国に来て、スミス博士、私、その他、ＪＩＣＵＦの人々を手伝って計画を説明することになった。各ミッション・ボードから五ヵ年間にわたり経常費と建設費を賄う資金を提供するという約束を得て、予定通り大学を開設する、という計画である。ハケット氏は、資金支出の根拠や妥当性の説明に実にすぐれており、また、湯浅博士は、きわめて効果的に、ＩＣＵの将来性と、日本が国際社会への復帰に努力する中でのＩＣＵの意義について説明された。教派の大方の幹部は、この五ヵ年財政計画の妥当性を直ちに納得した。やがて、五ヵ年計画について、各教派からそれぞれが応分とみる分担額の拠出の約束が得られるようになった。前述の通り、私たちと関係のある幾かの地域の教会は、特に多額の寄付をしてくれた。一九五〇年六月までに、タンブリン社による募金キャンペーンでは、一〇〇万ドル余り成果を得る見通しがついた。これは、諸教派から当初

拠出された一〇〇万ドルに加えての一〇〇万ドル余りである。これで、八教派からの一〇〇万ドル、プラス、タンブリン・アンド・ブラウン社による募金一〇〇万ドル、プラス、最初の五ヵ年計画期間中の約四〇〇万ドルとなる。これらの資金が示されたことにより、日本の同志たちの間に、米国とカナダの教会は最初の約束を守ってくれるという安心感が生じた。

しかし、危機がまた、到来しようとしていた。北朝鮮軍が一九五〇年七月、南朝鮮に入り、対馬海峡をはさんで日本のすぐ対岸にある釜山まであと三〇マイルという地点に迫ったのである。全米の人々は、この大学に中国基督教大学の轍を踏ませないためにはどうしたらいいのか考えはじめた。中国の大学はすべて一九四九年に、共産主義勢力下に入ってしまい、対中国派遣の宣教師は召還させられていた。事実、われわれはその後、間もなくベテランの宣教師と、中国語を習得したばかりの若い宣教師をＩＣＵの教授陣に迎えることができた。

Ｄ　再び日本へ—計画の推進

帰国する湯浅博士に同行して、教授陣容の検討と募集のため日本を再び訪れたのは、ちょうどその頃であった。キャンパスは開発が進んでいたが、まだ使用できる状態ではなく、ＩＣＵは東

京の教文館ビルにオフィスを設けていた。このビルには日本基督教団のオフィスもあった。ここでちょっと触れておくと、第二次大戦前まで日本では各教派は、お互いに独立ないしは並立して運営されていたが、戦時中、日本の軍部がそれでは複雑すぎるということで、全体を統括するキリスト教組織をつくるよう強要した。大半の教会がこれに従い、教団が設立されたのである。戦後、教派の一部がこの教団から脱退したが、主流教派の大部分は、そのまま教団を通じて活動を行なっていた。

最初の頃、私がＩＣＵの仕事と関係のない経験を持てたのは、教団での私のオフィスが、朝鮮戦争中、韓国から引き揚げてきた宣教師たちのオフィスの隣にあったためである。ある日、東京の米軍司令部から電話がかかってきた。韓国の農業関係宣教師アダムス氏と話したいという。氏は、韓国に長くいた二代目の宣教師であった。軍は氏に、韓国の東海岸沿いに敷設された鉄道の軌道の幅を尋ねた。兵員と資材移動のための鉄道機械を送りたいらしい。そんなところに鉄道はない、というのが氏の答えだった。軍は地図には線路用地が表示されていると主張したが、アダムズ氏は彼らに、線路用地はできているが、線路は全然、敷設されていないと教えていた。この電話のやりとりは、地図の正確さと更新が軍にとって、いかに重要かを教えてくれるエピソードであった。

日本再訪後、私はＩＣＵの理事会と何回も会合を持ち、米国での募金活動の経過と再組織の状

況を説明した。財団の基本財産となる資金を短期間に調達することができそうもないのは明らかであった。しかし、諸教派が約束した経常費と建設費関係の五ヵ年予算に対する寄付については、相当な好成績を挙げていた。大学の開発が進むにつれて、米国からの寄付金が一、〇〇〇万ドル、あるいは、それ以上に達し、五年が過ぎても寄付が続くことは十分期待できた。九月一日まで、この問題は私たちの話し合いの中で繰り返し検討された。

資金面でのこうした見通しをもとに、湯浅博士と私は教授陣の編成にとりかかった。ここで難しかったのは、大学開設に大いに役立つ学者を探し出して、資金が続くかどうかはっきりしない冒険的事業に参画してもらうという点であった。理事会には、著名な日本のリーダーの方々がおられ、いわば、人事委員会の役目を果たされた。ファカルティーの大半は常勤として任命する予定であった。一部の著名な学者にまず、非常勤でお願いし、大学の発展に伴い、常勤してもらう必要が生じた段階で、ファカルティーに加わってもらうことにした。

最初に行なう四名の教授選任は、戦略上、重要な部分をなすものであったが、私たちはすこぶる幸運であった。まず、神田盾夫博士がファカルティーへの参加と人文科学科長就任を承諾された。博士は、クリスチャンの学者グループのメンバーで、東京大学教授を務めておられた。文学博士号は東大から受けた。オックスフォード大学院で二年間、学ばれた博士は、完璧なバイリンガルで、その英語はイギリス英語そのものであった。博士は、人文科学科（歴史、文学、美術、音

楽、哲学、宗教を内容とする）の他の分野のファカルティーの選出について湯浅博士と私を助けてくださることになった。

二人目の教授は鮎沢巌博士である。博士は、労働経済学の分野で博士号をコロンビア大学から受けられた後、帰国して国際連盟の日本代表に就任し、ここで国際労働機関（ＩＬＯ）に勤務された。その後、満州事変勃発後、日本が国際連盟から脱退したとき、日本に呼び返された。博士はクェーカー教徒であり、戦争中は終始活動を控えられた。戦後、公共事業体労働に関する法律など重要な二件の労働法を起案した二つの委員会の委員長を務めた。博士は、グローバルな見方と経験の持ち主であって、社会科学科（政治学、経済学、社会学、人類学、心理学から成る）のファカルティー選任について湯浅博士と私に力添えしてくださることになった。

三人目は篠遠喜人博士である。東京大学で理学博士号を取得され、ＩＣＵの教授就任当時は、東京大学の遺伝学研究所の所長に在職しており、クリスチャンの学者グループの一員であった。また、文部省から委嘱されて、一般教養科目に一二単位の自然科学科目を採用する問題の是非を検討する委員会に加わり、実際にも「Science in General Education」というタイトルの雑誌を発刊して、その編集人となっていた。博士こそ、ファカルティーと自然科学科にリーダーシップを持つ、願ってもない日本人学者であった。後日、ＩＣＵの一般教養課程を企画する際に、この面で博士が貢献されたことについては後述する。自然科学科（生物学、物理学、化学、地学、数学か

ら成る）のファカルティー選出については、篠遠博士が湯浅博士と私を助けることになった。

第四番目に任命された教授は、ロバート・ゲァハート博士である。博士は日本に生まれ、オハイオ州立大学から言語学の博士号を受けた後、さらに、一年間、ロンドン大学で言語学を専攻し、日本で長年、教職にあった方である。有名な和英辞典を編集した他、多数のすぐれた著作がある。博士は日、英両語の教授ができ、語学科長に就任された。

この頃には、プログラムのどの面をとっても、資金的にも人員の面でもまだ、準備不足で、一九五一年には開学できないことがはっきりし、私たちとしては、一九五二年には教養学部の開校にこぎつけたいと考えていた。日本の新学期は四月に始まるのだが、教養学部設置認可を受けるには、その目的とプログラムの概要だけでなく、大学四年間のプログラムで提供される学科目を、そのすべてに番号と説明を付して定めることが必要とされ、また、全四ヵ年のプログラムと当初の四年間にファカルティーに加わる教員のために図書館の設置が必要であるという。

四年制大学の新設に必要なこれらの条件は、米国から来た者の目には柔軟性に欠け、不合理に見えたが、日本では戦後、多数の二年制の師範学校が四年制大学の認可を受けようとしていた。これらの学校がその学術的資源や資力の面で背伸びし過ぎないようにするために、文部省では非常に厳しい条件を設定していたのである。

この間、次のような決定が取りあえず、実行できそうであった。一つは、大学設置審議会の条

件に適合するため、一年間の計画推進期間中、各三学科に教授団を形成すること、第二の決定は、一九五二―五三年に語学研修所プログラムを展開し、最初の学生を受け入れるというものである。この学生が四年制大学の最初の新入生となる。このプログラムは、学業面における機能的な日英二ヵ国語使用を実現する英語研修プログラムとし、また、一般教育を試行するための学生グループを用意することにもなる。

湯浅博士と私は、ゲァハート博士の協力を得て、一九五二年四月、一六〇名の学生による語学研修所を発足させるべく、ファカルティーの招集にとりかかることになった。一九五二年四月の語学研修所開設のためには、学生募集開始二ヵ月前にキャンパスと教科目の青写真を添えて認可申請をしなければならない。認可は東京都から発給された。これに対して、教養学部の認可は文部省から受けることになる。ゲァハート博士が仙台の東北学院（ここで博士は英語科を担当していた）からＩＣＵに着任された。博士に次いで語学科のファカルティーに参画したのは、アーサー・マッケンジー氏である。氏はトロント大学で産業心理学の修士号を受け、カナダ合同教会からの出向で日本に滞在していた方である。氏は完全に日英両国語に通じており、後に、ＩＣＵにやってきたノンジャパニーズ学生に日本語を講義する集中講座を設置された。ゲァハート夫人とマッケンジー夫人は、いずれも日本人学生に英会話を教えた経験が豊かだったので、その目的でスタッフに加わっていただいた。語学科のスタッフには、さらに小出詞子氏、天満美智子氏が

加わった。このお二人は、後日、マッケンジー博士に協力してノンジャパニーズ学生対象の集中日本語講座の開発に尽力された。以上が語学研修所発足時のスタッフである。この学年度中に、語学研修所は、さらにスタッフを増やした。言語学専攻を希望する学生のために、網羅的な言語科を展開するためである。

その他、教養学部の一般教育と学科別プログラムの開発のために、一九五二―五三年、さらに教授陣容が補強された。

文部省で教員教育を担当されていた日高第四郎氏がスタッフに加わり、教職課程の開発に努力された。ＩＣＵに来られた当時、氏は著名な日本の学者の手になる明治時代の文化史一〇巻の編集責任者であった。日高氏は、カリキュラムの企画会議で大変、尽力された。ここでは、文部省の規制のために簡単には実施できないような案がしばしば、出されたが、日高教授はそのたびに、次のように言われた。「文部省の規制の下で何が認められるか、ということは考えない方がよい。そんなことをしていては思考がストップしてしまいます。とにかく、われわれとして何をすべきかを考えてみようではありませんか。それが決まったら、後は私が文部省に行って、文部省としてなんとかできる方策がないものかどうか聞いてきますよ。」シラキュースでも、ガンダーズ学部長から似たようなことを聞かされたものだ。最後に、当時、学芸大学の教授であった小島軍造教授が一九五二年に来られ、教養学部の計画立案に参加された。

篠遠博士は、北海道大学の物理学教授、三宅彰博士、東京女子大の化学教授、平野四郎博士、薬学博士の喜谷氏のＩＣＵ招聘に尽力された。篠遠博士の交友関係は、自然科学と一般教養のプログラムに豊かな人的資源を提供してくれたのである。

Ｅ　米国に帰って―計画の推進　一九五〇―五一年

日米両国内にファカルティー選定の規準に関する諮問委員会があった。学術、研究、教職に関する基準の他に、三項目の簡明な規準が設けられていた。

一、その信念と生活態度において、キリスト教と民主主義の価値と方途に積極的に従っているファカルティーを求める。

二、所属する教会において、その教会の活動を積極的に支持していると認められているファカルティーを求める。

三、何らかの個人的ないし階層的な集団が、真理解釈の枠組を決定するような組織に属する人は求めない。

ファカルティーを募集している課程で、また、その後、大学の進捗状況を米国の各団体に報告

している際に、私はこうした規準の意味合いについて出された多くの質問の典型ともいうべき興味ある事柄を二回経験している。

その一つは、ウィスコンシン大学での経験である。私はオールズ学長から、学部長たちと昼食を共にし、発展するＩＣＵの進捗状況について報告するよう招待された。ファカルティー選定規準について報告したとき、学部長たちは第一と第二の規準がキリスト教徒を中心に据えている点にどうも納得がいかないようだった。この人たちの意見の要旨は、キリスト教といっても、その意味するところは、人により千差万別であるから規準として意味をなさない、という点にある。

もう一つは、ニューヨークのユニオン神学校で、そこのファカルティーと会ったときの経験である。彼らは、第一と第二の規準でキリスト教を中心に据えるのは結構だが、民主主義を重視している点が不満だという。民主主義といっても人により、その意味するところは千差万別であり、規準として意味をなさないというのが、その見解の要旨であった。

実にいろいろな場所で、私はこれと同じ批判を浴びた。教育家やその他、一般社会の専門職にある人たちは、民主主義について、これを生活様式の一つとみなし、宗教については、これを統治の一方式と見る傾向がある。他方、宗教家は、民主主義を統治方式とみなし、宗教を生活様式であり、救済手段であると見る傾向がある。このことについては、本書の第三部、日本での一六年間の仕事を終えて帰国した際の経験について述べる箇所で、もう少し詳しく取り上げたい。

この頃には、私たちのプランでは、一九五三年の開校に向けての認可申請を準備するために教養学部の教科目と課程の立案に携わる一般教育（自然科学、社会科学、人文科学、語学）部門の教授集団が必要となった。語学研修所の初年度の日本人学生は、全課程の四分の一を、一般教育関係の実験的な授業にあてる予定であった。

私は、教養学部の計画作成に協力してくれる教授集団のメンバーを募るため、米国でかなりの時間をさくようになった。大学から大学へ、また、専門家の会議から会議へと尋ね歩きながら、私は、次の質問を繰り返した。「日本で教養学部の育成を第一の任務とする新しい大学を開くためにリーダーや学部スタッフを探しているのですが、もし、あなたなら、誰が候補者として最適だと思われますか？」。やがて、何人かの名前がたびたび、挙がってくるようになった。その最初の一人が、インディアナ州ゴーシェン大学の学長カール・クライダー博士であった。ロックフェラー財団の資金援助で結成された北中部カレッジ・大学教会による一般教育に関する多数の研究集会の顧問として高く評価されていた人である。米国高等教育協会の会合で博士と昼食を共にしたところ、この意欲的な事業に関心を示された。

ＩＣＵ設立事業の行政責任者として、私は、行政責任者の主たる貢献度は、想像性に富む任務の遂行にあたって、自分が糾合に成功した同僚の質の如何にかかっていることを知った。クライダー博士は当時、ゴーシェン大学で重要な目標を次々と達成されていた。プリンストン大学で博

士号を得た後、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで一年間、研究生活を送られ、一般教育の助言者としての名声は非常に高いものがあった。新しい大学を開くために、三年ないし四年の約束で日本に行くことは、クライダー夫人と三人のお子さんにとって生活が大きく変わることであった。しかし、クライダー博士とご家族は、奉仕の精神が旺盛であり、日本におけるチャレンジに応えるべく、万難を排してわれわれの求めを受諾された。

人探しの一年間に、私たちの注目をひいたもう一つの名前は、イリノイ大学の社会学教授デービッド・リンドストロム博士であった。博士は、大学を休職してスカンディナビア諸国での福祉制度の研究に従事し、前年に帰米されていたところであった。博士のことを湯浅学長に報告すると、学長は、スカンディナビア諸国の農村社会学は米国のそれよりも日本への適合性が高いと思われるので、その点でも博士の招聘は願ってもないことだと答えられた。

当時、ジョージ・ストッダート博士がイリノイ大学の学長であった。日本への教育使節団の団長を務められた方で、もちろん、わがＩＣＵの開設に関心を持たれていた。リンドストロム博士が、イリノイ大学のほうで三年間の休職を認めてくれるならば、ＩＣＵに行きたい、という意向を示されると、ストッダート博士は即座に、イリノイ大学としては一年を超える休職は認められないという厳しい方針を堅持していると返答された。そこで私が、この新しい大学の計画を継続的に推進するために、最低三ヵ年は滞在してもらえる人達を招聘する方針でやってきたことを説

明したところ、今度は博士から、次のような返答があった。「イリノイ大学では戦争遂行のため三年ないし、四年にわたり政府に教授を出向させておりました。多分、政府は今度は、平和のための活動にリンドストロム博士を三年間、ＩＣＵに貸してくれるでしょう」。そして、この提案をリンドストロム博士の所属する学部と理事会に諮って下さった結果、それぞれの承認を得ることができた。しかも、ＩＣＵ出向の教授として休職する間も、大学の退職年金拠出金と博士の任期を、イリノイ大学としてそのまま継続するという決定もなされた。

こうしたストッダート博士の臨機応変で柔軟な措置は、他の教員についても三ヵ年の任期を取り決める上で大変な力となった。

かなりの時間をＩＣＵの開校準備に充てていながら、私はまだ、シラキュース大学の教職にあり、幾かのセミナーを指導していた。日本に勤務するにあたっての最終的な手配を行なう段階になって、トーリー博士は、次のように言われた。「あなたがいつまで日本に滞在されることになるのかわかりませんが、いつ、このプロジェクトで、これ以上役に立てそうにないと思われるような障害が生じても、心配はご無用です。シラキュース大学では、あなたを無期限の休職扱いにしますから」。

ストッダート博士とトーリー博士の機略縦横なやり方は、規則を状況の主人ではなく下僕とみなして事を処する見事な指導性を、典型的に示している。規則というものは、多くの場合、決定

を行なうのに役立つが、その規則も、困難な状況の打開に適さない場合には、無視するなり、変更したりすべきである。このことは、社会と行政が高度に組織化され、問題の解決が法の許容する範囲内に限られがちな日本では、非常に有用な考えである。

海外で選んだ三人目の教授は、ハーバードで学位を受け、東洋美術を専攻のヒューゴー・ムンスターバーグ博士である。博士の両親は長年、中国におられた。もう一人、ウィリアム・ムーア博士が、ＩＣＵに着任された頃、ニューヨーク大学の教授が、『Ten Best Teachers』と題する著書を刊行したが、その中の一章は、ムーア博士を取り上げていた。ムーア博士は、殊にクリエイティブ・ライティングの分野では活力ある教官として、その名声通りの方であった。本書の七九頁から九四頁に、外国語として英語を学んだ日本、中国、韓国の学生のエッセイをサンプルとして掲げておいた。これらのエッセイは、母国語でのクリエイティブ・ライティングとしても、充分単位のとれる出来映えである。

日本生まれの自然人類学者で東大各員教授のゴードン・ボウルズ博士も、この教授団に参加され、教養学部のプログラムの策定に力を貸してくださることになった。スイスの著名な神学者エミール・ブルーナー博士が、計画年度にファカルティーに参加されたのは、発足早々の一九五二―五三年の間である。

私と湯浅学長、そして、ハケット副学長は、多くの時間を割いて、ミッション・ボードの事務

局や各教派幹部の方々に、五ヵ年財政計画の所要資金に対する各教派の寄付を正当化すべく絶えず、進捗状況を連絡、報告していた。

一九五一年十一月までには、たいていの教派から、この五ヵ年計画を支援する約束を取りつけていた。これらの教派では、その約束に、ＪＩＣＵＦを支援すべきすべての教派が支援すること、という条件を付していた。メソジストだけが意見が一致せず、しかも、その拠出予定額は、大口であった。何かはっきりしない理由で、鍵となるメソジスト教会の一つと意思決定手順としてのヒアリングがどうしてもできないままであった。ディッフェンドーファ博士は、教会関係の大学へのメソジスト派の支援を確保する非常に重要な役割を果たした。かつてDe PaulのPresidennt をしておられた博士は、海外のメソジスト・ミッションや大学に対するメソジストの支援を確保するために非常に重要な役割を果たされたことがある。海外のミッションや大学はメソジスト教会からの寄付金の取り合いをしたことがある。

ともあれ、日本ではＩＣＵ発足の手配が着々と整えられ、私は妻と息子のデービットを伴って、一九五一年十一月の第三日曜の午後、日本に向けてシラキュースを発つことに決まった。その日の午前中、オクサム主教がシラキュース大学のチャペル・サービスでお話しをされる予定になっていたのは、神の御業であったにちがいない。主教のご子息が、トーリー総長の行政補佐を務めておられ、私がご子息に私の問題について話したところ、彼は、チャペル・サービスの三〇

分前にお父上にお目にかかれるように手配してくださった。私が大学の目的、スタッフ集めの経過、五ヵ年計画、他の教派の募金進捗状況についてお話しすると、何も質問なさらずに、主教は「ＩＣＵに対するメソジストの支援を当てになさって結構ですよ」と、おっしゃった。それで、その午後、日本に向けて出発する際の私の大きな不安は、すっかり取り除かれてしまった。

Ｆ　日本での生活と体験　一九五一―一九六六年

大学の行政当局と理事会では、日本内外からキャンパスに来任するファカルティーとスタッフにできるだけ早く、住宅を提供する方針を採用した。さらに、海外から来るファカルティーやスタッフの住宅とアパートメントの基本的な家具調度は大学側で提供するが、それぞれの国に特有の家具や装飾は、各自が日本に持ち込むこと、という方針も決めた。また、海外から第一陣として日本にやって来る教員は自動車を持って来ることとした。一九五二年当時、日本の町で見かける自動車は、旧式のアメリカ車くらいのものだった。

そこで、私たち一家は、ミッション・ボードのオフィスを通じて、椅子や絵画、工芸品、それにもちろん、私のオフィスと書庫に必要な書籍類を船便で送った。それから、一九五一年十二月

十三日、日本に到着するまで、太平洋の船旅に必要な衣類や身の回り品をトランクとバックに詰め込んだ。私の家族にとって、太平洋を越えるのは初めてであり、航海中は毎日が新しい経験の連続であった。日付変更線を越え、時差にも慣れていった。私は、かなりの時間をノートや報告書を調べることに費やし、また、三人で毎日、日本語の勉強もした。船付きの牧師が、ある日曜日の朝集会を催し、その席で私は、新しいＩＣＵの設立計画について話した。

船が埠頭に近づくにつれ、最初に私たちをびっくりさせたのは、包帯のように白いバンドを頭に巻いた港湾労働者たちの姿だった。後でわかったことだが、これはただの習慣だった。荷物は大学に直接、運ばれたが、私たちはまず、東京に連れて行かれ、そこで昼食をとってからＩＣＵへと向かった。途中の車の中で米人運転手が言ったことから、何げないちょっとした態度が、国際関係の大きな支障になりかねないことを教えられた。日本では車は左側通行であるが、日本にかなりの期間、住んでいるその運転手は、「道を逆に運転するのはどうしても慣れませんね」と言った。この言葉はその後の一五年間、絶えず私に警告を与え続けてくれた。自分たちとは異なる日本人の慣行ややり方を逆だと思い込んではいけない、という警告である。一五年の間、私がことあるごとに学んだのは、相異なる文化には、それぞれのやり方や事物に対して、それぞれの現実に即した相異なる理由が存在する、ということであった。このことは、家庭や大学についても日本人社会についても当てはまったし、国連にいたるさまざまな過程についてもいえることだと思う。

私たちの二寝室付きアパートメントは、ビリーとデービットと私の三人家族には手頃な大きさであった。便利にできているし、家具、調度もよかった。平屋の脱穀小屋を改造した六世帯のアパートメントの一つである。

キャンパス内に住む教授や行政役員は、メードを雇うよう求められていることを間もなく知った。これは、日本語の能力がまったくない者にとってすこぶる好都合であるが、実は、そうするだけの資力を持つ者が、その資力をサービス提供者と分かちあうことが期待されてのことであった。この社会的な意味合いを含む期待が、学校当局の定めた方針の一つだということはすぐに察しがついた。

例えば、私は着任後、早々に土地利用委員会の会合に出席したことがある。ちなみに、ＩＣＵには、三五〇エーカー余りの土地があり、その利用法を決める必要があった。キャンパスの北西の隅から南東の隅に約三〇メートルの高さの崖があり、その下を小川が流れている。高台、つまり、キャンパスの北東部分は大学の建物と住宅に使用することになっており、低地、すなわち、キャンパスの南西部分は、田んぼと酪農場に利用する予定であった。その会合は、田んぼと酪農場の計画を立てるための会合であった。土地利用委員会の日本人委員長は、ＩＣＵの理事を務めている国会議員で、以前にコロラド農業大学を卒業した人であった。私はこの委員会の会合には

その後もたびたび、招かれた。

そこで知ったことだが、完全なプランだと、酪農場一ヵ所に、酪農場の管理人一名、牛の飼育管理人一名と実際の飼育係数名、搾乳管理人一名と搾乳係数名、田んぼと牧草地の管理人一名、馬の使役と後にトラクターの運転者数名、そして、馬やトラクターに引かせる器具の操作係数名が必要であった。合計すると、約一五名の人員が、一五〇エーカーの農地の管理と作業に従事することになる。

私の父は常勤の牧師であったが、イリノイでは父と、一人の雇人だけで一六〇エーカーの農地を経営していた。日本人委員にとっては、農場での仕事の種類が異なれば、それだけ、人をふやすのは当然なのである。私の故郷の農場であるなら、新しい仕事ができても、すでに農場で働いている人の仕事が増えるだけのことである。このＩＣＵの農場プランは、占領軍関係者や日本での経験が長い宣教師たちから聞かされていた非能率性を如実に物語っているように思われた。

米国では、アメリカ開拓期の大半の期間を通じて人口が少なく、働き手の数が不足していた。新しい仕事は、すでに別の仕事で忙しい人たちに割り当てられ、たいていの場合、彼らの報酬や賃金は、その新しい仕事を担当することで増えた。これがアメリカ的効率である。日本では何世代もの間、人口過剰が続いた。新しい、あるいは、今までと違った仕事は、仕事を必死で求めている人たちを雇用する新しい機会なのである。このことによって、賃金、その他の報酬が低く抑

えられがちであったが、徐々に人口の増えつつあった国民は、自尊心や必要物、そして、安心をも得たのである。

こういったわけで、物事をなんでも一般化してみようとする自分の考え方を、私は見直そうとした。私が日本にやって来たのは、民主主義とキリスト教の価値や方法を研究し、経験する実験場となる新しい大学の発展を助けるためであった。日本のこの非効率性は、米国の効率的なやり方に比べて、重要な点で、むしろ、より民主的、よりキリスト教的なのではないだろうか？　大学の設立と発展をめざして日本人の同僚たちと力を合わせるために海外からやって来た私たちが、いろいろな問題が発生するたびに、「誰が間違っているのではなく、何が間違っている」のかを問いかけるように学ぶ必要があったのは、このような理由からである。こうした態度で問題に対処できるならば、個人攻撃などに陥る危険を回避できるはずであり、対立点の多くを捨て去り、建設的な計画に向けて、相異なる見解の間に共感できる点を見つけ出すことができる。

これは、私たちが直面した、おそらく最大のカルチャーショックであった。米国は、第二次大戦を経て、強力で豊かで寛容な国となったことがはっきりしてきた。ドイツにはマーシャルプラン、日本にはマッカーサー元帥の博愛的なリーダーシップがあったし、米国の諸教団は戦後、復興資金を寄せて日本人を援助した。われわれは誠意を尽くして海外に経済や政治、農業、保健、宗教上のアドバイザーをつぎつぎに派遣したが、こうした援助を受けている人たちから見て本当

に必要なものは何かを、じっくり考えることはほとんどしなかった。米国のアドバイザーや宣教師たちがやったことは、たとえば、私の妻が近所の家の居間に入り込んで、そこの家具の模様替えを始めるようなものである場合が、あまりにも多かった。こんなやり方は、垣根を越えて友達になったり、近所づきあいをする最善の方法とはいえないし、言語の文化、国籍、宗教上の違いが垣根である場合には、その結果は、もっと深刻なものとなる。

（ここで読者にお断りをしておきたいことがある。私たち一家の経験を時間を追って報告するようにしたいが、経験の横への広がりも縦方向の推移と同様に大切だと思われるので、途中で意図的に脇道にそれることがあるかもしれない）。

家庭内での二、三の経験も、私たち一家にとっては、たちどころにチャレンジであり、意味を持つものであった。浴室と台所で手直しをしたいことが幾かあった。そのためには、のこぎりがいる。ところが、日本ののこぎりの歯は、アメリカののこぎりの歯と向きが逆になっていることがわかって、アメリカののこぎりを持ってくるんだった、と後悔した。アメリカののこぎりで切るときは、印を付けた線上を向うに押して切る。日本ののこぎりでは、手前に引いて切る。私は農場に育ったのでのこぎり引きについては、かなりの腕前であったが、まもなく、アメリカののこぎりを向うに押して線に沿って切るよりも、日本ののこぎりを手前に引いて切った方が、むしろ、正確に切れることがわかった。必要に迫られて異なった経験をするたびに、こうだとは限ら

ないが、大事なことは、異なったやり方が自分に合わないこともあれば、ぴったり合うこともあるという点であった。

一階の六世帯のアパートメントが満杯になり、メードのうち二人がポンプ小屋の向うに造ったアパートメントに住むようになった。まもなく、このメード達が、そのアパートメントで保繕係の二人の若い男性をもてなしていることがわかり、アパートメントの日本人以外の住人の間で、いささか問題になった。夫人連中のうち二人が、湯浅夫人のところに出向き、見たままを話した。ところで、このメード達がいたのは、日本で多目的に使う畳敷きの部屋が一室だけの日本式アパートメントであった。ふとんを敷けば、寝室となり、ふとんをたたんで低いテーブルとクッションを置けば、ダイニングルームとなる。テーブルを壁に立てかけて、クッションを床に置けば、リビングルームである。湯浅夫人は二人の夫人にこう尋ねた。「それで、ふとんは敷いてあったのかしら？」。夫人たちは、そこまでは気がつかなかった。「もし、ふとんが敷いてなかったら、リビング・ルームかダイニング・ルームでもてなしをしていたことになりますわ」。大きな多目的の部屋について完全に理解するには、同じ家族でない男女が、あるいは、同じ仲間の男女が、一つの部屋でふとんを敷いて寝ることは決して珍しいことではなく、男女が昔から同じ大きな湯舟で入浴するのと同じであることを知らなければならない。入浴については、面白い話がある。占領軍が大衆浴場での男女混浴を禁止したことがある。日本人は、浴場の中央にロープを張っ

て、一方に女性、片方に男性が入浴することで、この問題を解決した。

一九五一年十二月半ばから一九五二年四月後半までは、まだ学生がいなかったので、キャンパスにはバスの便がなかった。息子のデービッドは当時一四歳で、渋谷近くのアメリカンスクールに通っていた。学校に行くには、三鷹駅まで自転車で三マイル、それから新宿まで一二マイル、電車に乗り、乗換えて渋谷に行き、さらに、わずかの時間だが、バスで学校へという道のりである。新宿と渋谷では、乗り降りのプラットホームがたくさんあり、三つの路線が入っているため、電車の発着も多い、各駅停車もあれば、急行電車もある。正しい時間に正しい電車に乗るのに正しい線のプラットホームに行くのが、まず第一の問題であった。私たちは息子がこれなら一人で行けると自信がつくまで、登下校に付き添った。一人で通学し始めてから三日目の夜、帰りに新宿で違う電車に乗ってしまい、終点の調布で降ろされてしまった。幸い、そこはＩＣＵキャンパスからそう遠くなかった。息子は調布に着いたとき、自分が今どこにいるのかわからず、プラットホームに困り果てた様子で立っていたのだろう。一人のご婦人が「メイ・アイ・ヘルプ・ユー？」と言葉をかけてくださった。彼女が息子をタクシーに乗せてくれたので、息子は無事にＩＣＵキャンパスに帰ることができた。彼は家に帰るとこう言った。「お母さん、その人が『メイ・アイ・ヘルプ・ユー？』って声をかけてくれたとき、僕はこんなにすばらしい言葉、生まれて初めて聞いたような気がしたよ」

デービッドは、私たちと一緒の時や学校にいるときには、それほど困った目にはあわなかったが、日本人（同じ年頃の子供たちも含めて）とだけになる時間がかなりあった。息子はまもなく、しきりに、日本語を学びたがるようになり、私たちはアメリカンスクールの日本語コースを受けるようにすすめた。ところが、アメリカンスクールでは、日本勤務の米国人の子弟に日本語を教えていないのを知って、私たちはびっくりした。その学校は、水準の高い、非常にいい学校であった。生徒の大部分は、卒業したら、すぐ自国の大学に進学する予定の、専門職の人達の子弟である。だから息子の学校は、事実上、大学進学の予備校であった。しかし、米国の多くの大学では、日本語を入学に必要な履修単位として認めていない。そこで、日本のアメリカンスクールでは日本語を教えていなかったのである。その翌年、学校では日本語の教授たちをはじめ、デービッドは他の科目よりも日本語に興味を持つようになった。

一九五二年一月までに、ゲァハート博士夫妻は、マッケンジー教授夫妻、それに日本人の同僚たちが語学科に参入し、四月開校の語学研修所に初入学する一六〇人の学生対象の英語教授プログラムを編成した。その学生たちは、英語のヒヤリング、スピーキング、リーディング、ライティングの講義、ディスカッション、ラボラトリーワークに全体の四分の三の時間をかける。この研修所の目標は、学生たちに対し、日本語はもちろん、英語で授業をする教授の下で教養学部のコースを取れるように準備させることであった。教養学部では講義を聴き、ディスカッション

に参加し、教科書や参考書を読み、論文を書き、試験を受けるが、これを英語でやることになる。この語学プログラムと後日の学部プログラムは、いずれも学生たちを学問的レベルでの機能的二ヵ国語を身につけて卒業させるのが目的であった。

語学研修所の学生の入学選考は、教養学部の入学プログラムを策定し、試行するためのいい機会となった。だが、研修所の入学プログラムを公表し、入学願書を受け付けるには、まず都の教育行政当局の承認と認可を受ける必要があり、十二月に着任して私がすぐ取りかかった仕事は、語学研修所の認可申請書の作成であった。

この認可の取得には最後まではらはらさせられた。キャンパスの本館の改造は完成間近だったが、配管工事などは未完了で、東京大学の大教室で行なわざるをえなかった。英語集中教育プログラム、それと併行する実験的な一般教育プログラム、施設の説明については、認可機関の納得を得ることができた。キャンパスを訪れた係官は、本館の完工予定図と教育プログラムを見て、即座に認可を与えてくれたのである。

語学研修所に最初の学生を迎え、天皇誕生日の翌日（偶然、湯浅学長の誕生日であった）のコンボケーションで入学式が行なわれた。一九五二年の天皇誕生日には、重大ニュースとなる出来事が二つ起こった。一つは、講和条約の調印が発表されたことである。これをもって占領軍は、もはや、管制軍ではなく、安全保障軍となり、日本は、国際社会において地位を回復することが

できた。占領時代にも、その努力は払われたが、それが完全に達成されていたとはいえなかった。以後、新入生を迎え入れるコンボケーションや新しいファカルティーが着任するたびに、学長は次のように告げられた。「ＩＣＵのキャンパスには外人はいない。いるのはジャパニーズとノン・ジャパニーズだけである。お互いに話をするときには、同じ目の高さで話をする」。この宣言に従った経験のない人は、その意図するところを理解していない人である。先進国として認められている国から来た人たちにとって、他の国の人達を見くだした態度で話をするのは実に容易なことであり、また、どの国の人にとっても、他の国からの訪問者を見くだした態度で話をするのも実に容易である。だが、湯浅学長が、同じ目の高さで話をしなければならないと絶えず口にされたことは、ＩＣＵを真の意味の国際的なコミュニティーにする一助となった。

ＩＣＵに最初の学生を迎えた日に起きたもう一つの出来事は、東京の宮城前広場に沿った道路で米軍職員の車が四台焼き打ちにあった事件である。不幸な出来事であった。米国の新聞のトップ記事や有力誌「ニューズウィーク」の記事では、宮城前広場で三〇万から四〇万の暴徒が米軍の車両四台を焼き打ちしたと報じられた。私は記事の内容に、何か釈然としないものを感じた。その翌週、ＩＣＵで理事会があったので、私は理事長の東ヶ崎潔博士に氏の見解を尋ねてみた。当時、東ヶ崎博士は、日本の指導的な英字紙「ジャパンタイムズ」の編集長であった。博士はこう答えた。「実は、私どももアメリカの大々的な報道には、びっくりしましてね。当方で撮った写

真を見直してみて、さっそく、全国紙の朝日、読売新聞社の方たちと一緒に共同通信社に出向き、写真を調べてみたんです。そこではっきりしたのは、暴徒の数は約三〇〇人で、それを煽り立てる群衆が約三、〇〇〇人余りいたという事実です。しかし、宮城前広場にいたそれ以外の三〇万から四〇万の人たちは、毎年、天皇誕生日にやって来るごく普通の市民でした。その人たちの大部分が、新聞を見るまで車の焼き打ちがあったことなど知らなかったくらいなんですよ」。

その事件の前も後も、私は報道の自由は守られなければならないと確信しているが、この出来事によって、その自由に伴う責任、そして、常にすべての自由な人々の自由に伴う責任について真剣に考えるようになった。一般大衆にどこよりも早くニュースを知らせたいという報道の競争の中で、たびたび、誤報が行なわれる。だが、報道が誤報であったと気がつき、そのニュースについて、より正しい見方ができるようになってからでは、その記事は、もはや第一面のトップニュースではなく。二頁目か三頁目、あるいは五頁目にしか出ない。正確なニュースを報道し直す場合には、確認のとれなかった速報や、間違った速報を報道したとき以上の取り扱いをすべきである。一面に真相を伝える記事を載せる場合の大見出しは、事件直後の記事の大見出しと同じ大きさにすべきである。この点については、私の帰米について述べる第Ⅲ章で、さらに、具体的な例を取り上げることにする。

G　一般教育課程の策定

一九五二―五三年に、約一八名のファカルティーが教養学部のプログラム作成に関与した。社会科学六名、人文科学六名、自然科学六名である。そのうち約半数が常勤のファカルティー、他は非常勤のファカルティーとして任用され、プログラムの進展にともなって常勤になる予定の人たちであった。

一般教育プログラム

各教授がそれぞれの専門領域で、一般教育に大きく貢献できると考えた科目についてアウトラインを作成し、一週に一回、会合を開いてこれを検討した。各科一二単位の一般教育科目を用意することとなっていたが、各教授が提出したアウトラインには、たいてい六単位に相当する科目が盛り込まれていた。もちろん、全部で一二単位にするには、大なたを振るわなければならない。人文科学科のファカルティーの最終決定によると、一般教育は、洋の東西にわたる古代、中世、近代の歴史、哲学、宗教、文学、芸術、音楽の、いわば、らせん階段を学生にのぼらせていくもの

でなければならない。たとえば、プログラムは、イザヤ書、マルコ伝、論語、伝教の経典ではじまり、宗教改革を経て、近代の宗教にいたる。その間、同時に古代、中世、近代の哲学、文学、芸術、音楽を総合的に取り上げる。これで、五つの学問分野を横断するらせん階段ができ上がる。つまり、人間と文化にもっとも永続的な影響をおよぼした人類の貢献を理解するために、入念に選択されたプロセスである。

プログラムの検討中、ファカルティーたちは特に意義深い、一つの経験をした。年もおしつまったある日のこと、一人のファカルティーが次のような発言をして、ディスカッションを中断させた。「立案に当たっての全体の流れの中で、私たちは何を学んだだろうか？　それを自分に問うてみて、ふと気がついたのですが、哲学、文学、芸術、音楽から東西の宗教を取り去ったら、これらの科目は現実味や価値を失ってしまうのではないでしょうか？」。この発言を受けて話し合いが行なわれた結果、出席者たちは、哲学やその他の学問分野については全くその通りであり、芸術や音楽についても似たような事がいえる、と思いいたった。

全三学科のファカルティーたちは、月に一回、全体会議を持ち、現階段の作業の説明と進捗状況の報告以外に、特にそれぞれがどんなことを考えているかを明らかにした。上に触れた人文科学科での最高の経験が浸透してきて、すべての学科の教育について、非常に全体論的な視野での作業――たとえば、宗教と科学と経済学の関連づけなど――が行なわれるようになった。

各科のファカルティーは、それぞれの才覚と洞察力に従って、一般教育の一二単位を設定していった。たとえば、社会科学科のファカルティーも人文科学科と似たようなプロセスでプログラムを作成していったが、まず個人と集団の知的、情動的、行動的潜在能力の理解に心理学がどう貢献しているか、というところからプログラムをスタートさせることにした。これは、知的能力の中心化傾向と範囲、そして、この能力が伸ばされ、あるいは、逆に抑えられる条件を取り扱う分野であり、個人と集団の情的構造化と解体化、そして、行動に活力と方向性を与える情的、認知的経験を扱うものである。

家族に特に関心の深い社会学者は、知的潜在力が情動をまとめあげたり、逆に混乱させたり、また、価値を形成したりする上で役立つ、実験室としての家族をつけ加えた。一学期の単位は、自然人類学で締めくくった。その狙いは、ヒトとその環境の特質、そして、それが人間の行動を促す知力、情動、価値観の発展に与える影響を学生に把握させることにあった。

三単位の二学期は、米国、欧州、日本における産業革命の起因と結果を取り上げる。労働経済学専攻の鮎沢博士にそのリーダーシップをとっていただけたのは幸運であった。博士は、日本の戦後の労働法を起草した二つの委員会の委員長を務め、労働委員会委員も経験された。米国と英国で経済学を学ばれたクライダー博士が、この第二学期の全体を締めくくることになった。

社会科学の第三学期は、第一次、第二次世界大戦の前後を扱うことにした。この科目の目的は、

両大戦を全体として振り返って、交戦国双方の任務の目的とされたものが、どの程度、実現し、失敗したかを、できるだけ詳しく調べることである。この科目は、社会科学科全体が担うこととした。

最後の三単位は、まず日本の新憲法から始め、この憲法によって有権者と当選者に与えられた自由と責任の問題を扱うことにした。これには、鵜飼博士の助力が得られた。博士は当時、東京大学の憲法学の教授で、スタンフォード大学から博士号を取得され、実際に新憲法作成に関与した委員会で活躍された。この三単位の締めくくりには、世界政府の試み、国際連盟、国際連合を取りあげた。カールトン大学から来られたデービッド・ブリンジョーンズ博士は、米国の政治家フランク・B・ケロッグに関する著書があり、鮎沢博士と共に、この単位に生きた意味づけを与えた。

以上の社会科学の一般教育科目四コース（各三単位）は、各個人が自己を理解し、自分が社会環境にどう反応するか、社会環境の要因が産業革命によって、どのように表われ、影響を受けたか、世界大戦でどのように利用され、誤用されたか、そして、一国および国際的な立憲政体によって与えられている機会について理解するよう学生を導くものであった。

生物学の最初の三単位では、日本染色体学会会長の篠遠博士は、遺伝学の学習はグリーンピース、イエローピース、ショートピース、トールピースなどの繁殖上の優性形質とか劣性形質といった領域を超えたものでなければならないという信念のもとに、すべての学生に、遺伝子の結

びつきが知能の水準、情緒的安定性の遺伝、身体的特徴やエネルギーのアウトプットの面での個人の素質などに、どの程度、関わるのかを理解してもらいたいと考えた。一般教育の生物学におけるもう一つの大きな狙いは、疾病に対する身体の防衛機構と各種の生物学的抗生物質の開発について学生に知ってもらうことであった。

次の三単位は、二人の有機化学者が栄養作用に対する科学の貢献、薬化学者が薬物の恩恵と危険性に関する科学の貢献を中心に担当することになった。エール大学で博士号を受け、その後、カンバラント大学で一年、さらに、シカゴ大学で一般教育の研究チームに一年在任したドナルド・ワース博士が、一九五二年にファカルティーに加わった。次の三単位では、物理学者が、力の分解における、また、人間が使えるようになってきた莫大な量のエネルギーの利用上の安全における力学的なメリットとデメリットをできるだけ明快に示し、学生たちが、さらに、大きな機械や原子力の時代におけるエネルギーを理解できるようにした。自然科学の最後の三単位の主たる力点は、社会的、物理的統計認識への数学の貢献におかれた。中心化傾向、可変性、相関などを取り上げた。この数学との関連では、小さいが意味のある単位として天文学を組み込んだ。

一九五二年―五三年度末までには、一般教育のために策定したプログラムの約三の一は、語学研修所の学生を相手に実験的に試行済みであった。その年度の終りに、語学研修所のファカルティーと学生がコンボケーションを持ち、一年間の活動を主として学生の側から振り返り、評価

を行なった。キャンパスの改造は完了していた。フットボールフィールド程の長さで三階建てのほぼ新築の建物ができた。図書館には、基本的な一般参考図書と百科事典、一般教養三部門と語学の基本的な図書、約一〇〇種の定期刊行物を含めて約一万冊の図書が入った。蔵書の約五〇％は洋書、他は和書であった。雑誌は四〇％が洋雑誌、六〇％が和雑誌であった。

この時期に発足した学生会の初代会長が、「この建物は、最初、戦争中に航空研究所として建設された。それがＩＣＵの教育の館として変身した。われわれ学生は、今、剣を打って鋤刃に、槍を打って刈り込み鎌にしているのだと、教師もろとも感じている」というステートメントを発表しているが、これはＩＣＵにおける一つの道標ともいうべきものとなった。

このステートメントの真意を私が完全に理解できたのは、一般教育の心理学で学生たちから定期的に提出させた作文を読んだときであった。私は、各学生に、過去に対する自分の評価と将来に対する自分の考えに最も大きな影響を与えた経験について記述するよう求めた。日本での一五年間に、私はこの種の作文を約九〇〇篇読んだが、いずれも例外なく、戦争、敗戦、戦後の影響に触れていた。作文の大半が、学校で、黒は黒、白は白と教わっていた事実を述べていた。戦争中に日本人がやっていたことはすべて白、米国がやっていたことはすべて黒だという教育である。それが突然、終戦と共に、黒が白であり、白が黒であると教わるようになった。これが学生たちの体験した葛藤であった。米国が日本にやって来たら、報復のために日本を略奪するだろう

と教えられていたのに、自分たちは米国が再建を助け、飢えを癒しにやって来た日本に、こうして生きているのである。事実、学生が少なかった創立期には、在日米軍のチャペルセンターが奨学金や援助金を全額賄ってくれたし、ＩＣＵは、学生が経済的な理由だけで大学から排除されることがあってはならない、という方針で運営されていた。当時のＩＣＵの学生の少なくとも一〇％は、戦争か結核で父親を亡くしていた。日本の学生は、その行動を促し、方向づけた、これまでの価値観に新しい方向を与えるという、苦しいが勇気の湧くプロセスを歩んでいたのである。

語学研修所初年度の評価に話を戻すが、学生たちは、英語の集中講座で学んだことには満足していたが、教養学部第一学年度の四分の三を英語の集中学習に充ててしまうのは不安のようであった。一年次と二年次に一般教育三六単位を完了するようにすれば、大学に入学した目的である、専門的な関心の追究に十分な時間を充てられる、と言う。学生の懸念と批判を受けて、ファカルティーと行政当局では、語学の必修が大きな負担になっていることを認識し、各学期を二週間延長することに決めた。これで学生が一六単位でなく、標準的に一八単位を取り、全四年の課程で、一二八単位でなく卒業要件の一四四単位を履修できるようにしたのである。これは、学生たちが自分たちの関心や心配を当局とファカルティーに認められ、大学政策の中に取り入れられるのをはっきり見た、最初の大きな出来事であったと思う。このようなやり方は、戦前の日本に見られた、高度に組織化された権威主義的な組織では、一般的とはいえないやり方であった。

H　四年制教養学部の開設と歩み

一九五二―五三年度に、ファカルティーと行政は、四年制教養学部大学の設置認可申請書を作成した。入学志望者のために、英語集中教育プログラム、一般教育プログラム、学科ごとの専攻科目の要覧が発行された。この要覧から、プログラムの全体的な構成を記述することができた。認可取得条件を満たすには、その他、コースのアウトラインと参考書目録を掲示しなければならなかったし、これらのコースとこれを教授する教員に必要な図書館を設置しなければならなかった。また、教育・研究用の建物、行政用のオフィス、キャンパス、上下水、排水を完備する必要があった。認可申請は、一九五三年一月の期限に間に合わなかったが、申請書提出期限を延長する特別認可の取得に成功した。大学院教育学研究科の科長に就任予定の日高第四郎教授は、文部事務次官であった。早稲田大学の和田博士は、大学設置審議会の会長を務めておられ、新設のＩＣＵの目的とプランにたいへん深い関心を寄せておられた。このお二人が大学設置審議会を説得し、そのお陰で、申請書提出期限が延期されたのである。

申請書を受理した審議会の委員たちは、四台の車に分乗して指定の日に来学し、直ちに手分けして、施設の綿密な点検にかかった。何人かは床面積、窓や、照明、教室、講義室、オフィスなどの測量を始めた。いずれも仕上げ工事が完了しており、規格条件をトップレベルでパスするものであった。また、何人かは図書館に行き、本を一冊一冊引き出してチェックし始めた。よその学校では、図書館に教授の私有の本がいっぱい並べてあって、その多くは検査が終ると引き上げられ、各教授のライブラリーに戻っているという例が、あまりにも多かったためである。ＩＣＵの図書は、司書のブリンジョーンズ夫人とスタッフの手ですべて分類済みであった。

大学設置審議会の会長が湯浅学長にＩＣＵ理事会室で会いたいと申し出られた。そこには篠遠博士が同席されており、博士が日本染色体学会の会長であることを知っておられた会長は、博士に「先生はここでどんなお仕事をなさっているのですか？」と尋ねた。篠遠博士はこれに対し、「自然科学科の科長をいたしております」と答えた。「ＩＣＵにはどのくらい時間を割いておられるのですか？」「常勤なんですよ」といった調子で、神田博士や鮎沢博士とも同様のやりとりがあった。湯浅学長は、他の日本内外の教授たちも部屋に呼んで、審議会の人たちに紹介した。

審議会の会長は、四年制大学の設置について細かな要件が設定されたのは、必要な人的物的資源を欠いたまま、数多くの高校や専門学校が四年制大学昇格をめざして殺到しているからである、と説明された。そして、ＩＣＵに来る前にも、この種の学校の合否の調査に行ってきたところですと言って、「私たちは、お話しにならない所から、最高のレベルの所へ来た思いです」と感

想を述べられた。私の見るところ、ＩＣＵの教養学部が大学設置審議会の承認を得られない理由など全くなかった。

そして、予想通り、認可を得て、一九五三年四月二十八日、私たちは教養学部に一九八名のフレッシュマンを迎え入れた。この学生たちは、約六〇〇名の入学志願者から選抜された。合格者たちは、全国の進学適性検査とＩＣＵで開発した学力テストを受けた。このテストは、慎重に選定した論文を内容としたものであり、論文は、大学の参考書ないしコースでの課題とほぼ同等の難易度を持つと判断された論文であった。選定に当たっては、受験生がこれまでに目にする機会が全くないような論文をということで慎重を期した。まず受験生は六〇分間、この論文を読む。それから、その内容をもとにしたテストが出される。ボキャブラリーと事実関係のテストに次いで一連の結論を選択するテストである。論文の内容に合致している結論、部分的に合致しているもの、関係のないもの、論文の内容に反するものを並べて選択させるテストである。その後も毎年、新しい論文を選定し、テストも新しく開発した。年を経て、このテストは、進学適性検査の成績と高等学校での成績をより効果的に評価判断するのに有用であることが実証された。

これら二種のテストの他に、受験生は、行政とファカルティーのメンバー計三人の面接を受けた。入学プログラムを完了した後に行なった調査の結果、ＩＣＵの合格者の九〇％は、進学適性検査を受験した学生の上位一〇％に位置していることが判明した。

合格者の質は、きわめて心強いものであった。この新設の大学は、かなりの評判にはなっていたものの、どの程度、優秀な学生を集められるかは予測がつかなかった。日本では大学入試競争が激しいので、多数の志願者があるという確信はあったが、合格者のうち他の大学を受験し、エリート校の旧帝大に合格しながらＩＣＵに入学した学生がかなりいることを知って、私たちは意を強くした。つまり、この選考結果は、きわめて優秀な学生たち、著名な教授陣、慎重に計画されたプログラム、充実しつつある図書館を得て、ＩＣＵは年ごとに前進して毎年、新入生を迎え、やがては四年制のプログラムを展開できる、ということを意味したのである。

前記の通り、奨学金など援助資金の交付、報酬を得るための労働体験の機会の提供を大学の方針とし、学生が経済的な理由だけでＩＣＵ入学を妨げられることがないようにした。学生は、あらゆる職業の家庭から来ていた。もちろん、大方は専門職と管理職の家庭の出であった。四六都道府県のうち、最初の学生に出身者がいなかったのは、わずか二府県であった。

学生会の年間誌、The ICU,1953－54の創刊号で、編集者が一年を振り返って次のように述べているが、これはおそらく、大多数の学生の意見を代弁していると思われる。

一九五三年三月十三日、われわれ一九八名の新入生が、心も踊るＩＣＵ生の讃美歌「正しく清くあらまし」が歌われる中を行進した日から一年が過ぎた。一人々々が、この新しい生き方の中でベストを尽していこうと希望に輝いていた。未知でユニークで、大変な努力を要する、ここで

の生活に耐え切れず、挫折しかけた者もいたであろう。しかし、ほとんどが喜びと感謝の念をもって困難を切り抜けた。勉学、語学の演習、その他、諸々の仕事を多く抱えながら、なんとか時間と精力をやり繰りしてクラブをつくり、軌道に乗せた。戦後以来、日本の教育の特徴となった一般教養課程の負担は大きく、自由にできる時間がほとんどなかったが、それも切り抜けた。そして、一〇月頃にはすべてを軌道に乗せ、先を見るゆとりができてきた。ブルンナー博士の来日は、われわれの士気を大いに高め、コンヴォケーションの講演者、ことにルーズヴェルト夫人、コムプトン博士やノーマン・カズンズ氏らの来訪も同様であった。コンヴォケーションが、社会に開かれた窓だとすれば、毎週、行われる礼拝はわれわれの精神的生活を豊かにする基盤であり、礼拝を通じてＩＣＵの真の姿が見えるようになった。クリスマスの祝典は忘れがたく、先生方の家庭に招かれたのも良き思い出である。素晴しいキリスト者の交わり！　ユニークなＩＣＵ！　とにかく素晴しい一年であった。やるべきことは、もっとあったかもしれないが、われわれとしては、「精一杯」の一年であった（「国際基督教大学創立史」一六五―一六六頁）。

私たちは、学生一人一人にファカルティー・アドバイザーをつけるという制度を設けた。これは、日本では比較的革新的な制度であった。この制度は、単位履修の条件が硬直化するのを防ぐのに与って力があったし、その上に、さらに革新的な制度を重ねることができた。たとえば私は、医者を父親に持つ学生をアドバイジーとして受持ったことがある。この学生は、将来、病院管理

に携わるための勉強がしたいと言う。当時、日本ではこの種の大学院プログラムはなかった。だが、私たちはこの学生に助言して、複数の学科の科目を学科間専攻させることにした。彼は自然科学、経済学、政治学、社会学から最も有用な専攻科目履修した。卒業後、彼は、聖路加病院（基督教会の資金援助による病院）の事務長補佐になった。この病院は、極東で当時、最大の病院であった。一年後、彼はフルブライト奨学金の出願をした。ピッツバーグ大学の病院管理学士課程に入学するためである。日本のフルブライト委員会は、このような修士課程は設けられていないと判断して、この学年の申請を却下した。翌年までに、同委員会はこの課程が存在することを知り、フルブライト奨学金の交付を認めた。彼は病院管理学の修士号を習得し、その後、厚生省の新設部門である病院管理研究所を開設する仕事に就き、現在同研究所の主任を務めている。

もう一人、テレビのニュース解説者になりたいという学生がいた。そのため、社会科学と人文科学から、もっとも役立ちそうな科目を取ることを希望し、英語集中講座によって、この学生は、機能的な英語能力を身につけることができた。現在、彼は東京放送ワシントン支局にいる。他にも、学生たちの遠大な志を支えるために、柔軟な履修計画を立てた例をいくつも挙げることができる。

しかし、プログラムそのものは、特定の科目を専攻するのでなく、一般教育と専攻学科において広い分野を網羅するようになっている。このことがいかに重要かは、日立製作所の国際部担当

副社長であった原口氏の発言に明瞭にみてとれる。最初の学生が一九五七年に巣立ったあとで、私は原口氏から東京の国際会館での夕食に招待された。その際に、ＩＣＵの教育内容について知りたいということで、次のような話をされた。日立製作所では、毎年、約二四〇名の大学卒業生を採用している。大半が工学部の出身者で、経済学部が若干名、その他は、社会科学専攻の学生であるという。この他に日立では、通訳として東京外語大学の卒業生を二、三人採用している。ところで、今年はＩＣＵの卒業生を二名（一名は自然科学、他は社会科学科の卒業生）採用したところ、この二人が専門知識を要する場合でも日英、英日の通訳ができることが程なくわかった。氏によると、東京外国語大学の卒業生は、技術的な言語力だけが必要な通訳では大変すぐれた仕事ができるが、専門的なレベルでの通訳になると限界があるという。私はＩＣＵでの日本人学生を対象とした英語教育プログラムの性格について説明し、さらに、各学生は履修科目の二五ないし四〇パーセントを英語で話す教授の下で受けていることや、ＩＣＵの目標は、専門レベルでの実用的機能的二ヵ国語能力であることを話した。すると、氏は「わが社で採用した二人がその実例としたら、その目標は達せられていますよ。」と言い、さらに、ＩＣＵの学生にはユニークな面がもう一つあり、典型的な工学部や経済学部の学生よりも広い視野で問題に取り組むことができるようだ、と述べられた。これを聞いて、私は幅広い基礎を持つ教育が成果を上げつつあることを改めて確信した。

機能的二ヵ国語能力は、When Youth Write 中の課題作文集に例証されており、同書の序言と編集委員会の言葉がこれについて解説している。（ＪＩＣＵＦ・４７５ Riverside Drive, N.Y.C. で入手できる。）

序言
学生たちが考えるとき
熱くそして深く、
若人が書くとき
しかも見事に書くとき、

何か創造する
豊かで価値ある何かを
自らの内に、自らにとって、
そして他の人たちにとっても

過去についての審判
現在についての想い、
到達したい目標、
生きるための信念
耳を傾けるすべての人たちにとっての、
若人の解き放たれた心の中の信念
神のみ許では価値ある手の中にやって来る

ＩＣＵの学生のペン先から新しい大学を建設する最大のスリルの一端がかいまみえる。学生たちが書くには、その前にものを考えねばならない。人を納得させるように書くには、信念が必要である。このようにして書かれたものには、達成された教育目標が見事に表出される。過去４回にわたって、私の机の上には、二五篇余の作文集が置かれてきた。これを妻と私は、四晩かけて、声を出して読んだ。一つ一つ読み進めながら、私たちは喜び、感激し、時にははっとさせられた。作文を三部に分け、謄写刷りにして配布した。

昨年、米国に帰っていたとき、私は、このうち比較的短い作文多数を説教壇や講堂や食堂などでの話に使った。いつも同じ質問が出た――出版されていないのですか？　手に入りませんか？

以下の掲げるのは、ウィリアム・ムーア博士とその同僚であるマーガレット・トンプソン夫人、山本夫人のクラスの作文から幾つか選んだもので、日本人、韓国人、中国人学生が英語で書いている。

戦争の惨禍を経験したことのない国の人たちでも、戦争というものが若者の情動組織と人生観にどのような影響を及ぼすかを、明白とみてとれると思う。

お互いを尊敬し、平和を守る礎は、偏見や先入観をはるかに超えた深遠な思惟の中に見い出せるのではないだろうか。

モーリス　Ｅ・トロイヤー
学務および学生問題担当副部長

一九五七年三月

作文および作文を書くに至った理由について

一九五三年四月、ＩＣＵに入学して以来、私たちは英語で自分のことを書いてみたいという強い願望をもちつづけてきた。ここに掲げた作文は、その私たちの努力の成果である。

フレッシュマン・コース「リーディング・アンド・ライティング」の二学期に「This I believe」という題の本で、人それぞれの人生観について学んだ。その本に出ている二、三の文章

について解釈が済んだところで、先生から、これまでの様々な経験から得た人生観について書いてみるように言われた。

「リーディング　アンド　ライティング」の四クラスのうち、一年生の約半数に当る六五人が希望してこの課業に一週間あまりかけた。それぞれが自分の人生観の基本となっているものについて考えをめぐらせ、その由って来るところを追求し、最後にそれを言葉にした。

この試みは、私たちにとって有益だったと思う。(1)の自分の精神的成長について将来、省みるためのデータを書き留め、(2)ほとんどの者にとって初めての経験であったが、少々乱雑な思考を系統立てることができた点である。人々は、私たちの作文から、日本の大学生の重要な考えの一端をうかがい知るかもしれない。しかしながら、私たちが日本の学生全体を代表しているとは言い難い。

人生観や信念は、年齢や経験と共に変っていくが、私たちの作文が現時点における私たちの現実の姿を結晶化したものであることを、読者諸氏は知っていただきたい。

編集委員会

教師をめざして

小学校、中学校、高等学校を通じてよき助言者に恵まれなかったことが、私が今まで残念に思

うことの一つである。といっても、私の習った先生が全部知的でなかったとか優れた先生でなかったということではない。しかし、生徒としての私の立場からすれば、先生方が、一人一人の生徒にもっとやさしく、もっと真剣であって欲しかった。先生は、教壇に立って、そこから「これをやってはいけない、あれをやってはいけない、これをやりなさい、あれをやりなさい」といつも言っている存在のように私には思えた。事実、先生に対して疑問を抱いたり、反対したりすることはほとんど考えられなかった。率直にいって、私は、どの先生とも気楽に話せるような気持ちになれなかった。先生と私との間にはふれあいを阻害する形式主義の壁やある種の恐れがあったといえるだろう。深刻な事柄だけでなく、些細な、取るに足らぬ事柄であっても、自分に本気で耳を傾けてくれる人がどんなに欲しかったことか。困ったときの助力や失敗したときの助言を求め、また一緒になって喜びを分かち合ってもらうことのできるような人が。こうして私は、先生との真に人間的なふれあいという点で、人生の船出を準備する時期に不可欠な何ものかを得られなかったような気がする。

このような経験を通じて、漠然とではあるが、教師になりたいと思うようになった。自分自身が先生に対して抱いた類いの不満から生徒たちを守ってやれるような教師にである。私には、自分がなりたいと思う教師像が描けそうだ。

何よりもまず、生徒一人一人の友だちでありたいと思う。子供たちと共に話し、聞き、考え、

歩き、食べ、歌い、遊びたい。そして何よりも、私はどの子供からも話しかけられたいと思う。先生に向って話しかけられるということは、その先生への信頼が深いことを表わし、先生が生徒を信頼して初めて可能になると思う。真の友人同士がそうであるように、私は生徒に対して真剣でありたいし、生徒からも同じように遇されたい。

単なる教える人ではなく、協力者になろうと思う。教師は、既成の知識を自分の貯えから次の世代に伝達するだけのしゃべる機械になりがちである。協力者になるには、私ももう一度学びの徒に戻らなければならない。生徒たちと一緒にどんな課題にも取り組み、成長の意欲に燃える一人の生徒に立ち戻らなければならない。

生徒一人一人をかけがえのない、個性ある存在として尊重したい。特別な才能を持っているから他の生徒よりすぐれているとか、逆に際立った能力がないから他の生徒より劣っている、というふうに判定してしまわない。誰も他の人に取って代わることはできないのだから。人間を区別するのは、知能の優劣ではないと思う。そしてこの理由から、私は誰にも他の人と同等の価値があると信じる。

教師の任務は、生徒から生徒自身も気がついていないかもしれない可能性を引き出すことであると思う。誰にもそれぞれの必要に応じて何らかの能力が賦与されているはずである。したがって、教育者は、一回一回の呼吸がそのまま成長のプロセスであり、教育のチャンス、すなわち可

能性を見つけ出すチャンスなのだという事実に思いを致すべきである。

日本人（女）

処方薬はスウィング

病気になってベッドで寝ているとき、（＊）私はシンフォニーよりもスウィング音楽を聴くのが好きだ。チャイコフスキーの交響曲第六番で、第一楽章の冒頭、バスーンが非常に哀しい調べを奏でる。コントラバスから響いてくるうつろな音もある。全体が私を恐怖に追い込み、震えさせる。第一主題のアンダトーンが私を苦しめ、落ち着かなくさせ、淋しくさせる。第二主題のトランペットの陰鬱な音色が私の疲労感を増大する。そして、第四楽章の哀調を帯びた嘆きが私を絶望感に追いやる。他方、スウィング音楽は、その賑やかさで憂鬱と寂寥を忘れさせてくれる。「ボディ・アンド・ソウル」のベニー・グッドマンの魅惑的なクラリネット、「ビージーズ」ではウッディ・ハーマンのサクソフォンに続くハリスの夢見るようなトロンボーンソロ、そして、「ワン・オクロックジャンプ」のカウント・ベイシー演ずるリズム感豊かなピアノが私を勇気づけ、回復に向わせる。「ベーマン・ストリート・ブルース」のハイ・アームストロングは色街のメランコリーなムードを運んでくるが、彼の演奏は決して私を苦しめず、軽やかな気分にしてくれる。

交響曲は緊張を求めるので、すぐに疲れてしまう。モーツァルトの交響曲四〇番第四楽章の不健全なまでに人を興奮させる情熱の嵐、ベートーベンの交響曲第九番第一楽章の迅いテンポ、第七番第三楽章のスケルツォは、私には耐えられない。しかし、スウィング音楽は、哲学よりもリズムに重点をおいているので、私のいらいらした気持ちを軽くしてくれる。「ザ・クラウド・オブ・ターコイズ」では、デューク・エリントンのピアノに合わせたローレンス・ブラウンのトロンボーンが甘い言葉をささやきかける。スウィングは、その豊かなバリエーションで私を生き生きさせてくれる。「オン・ザ・サニーサイド・オブ・ザ・ストリート」、「ザ・マン・アイ・ライブ」、「セプテンバー・イン・ザ・レイン」、「ピシャス・バタフライ」でグッドマンの陽気なクラリネット、テディ・ウィルソンの意気のいいピアノ、ハンプトンの躍動感あふれるビブラフォンを聴くと、ベッドの周りでダンスをしたい気分になる。

注＊結核のため6ヵ月間病床にあった。

日本人（男）

釜山めざして南へ

私がソウルの家を出て避難民の生活に入ったのは、一九五〇年六月二十八日の朝のことであった。共産主義者の侵攻が始まってからたった三日でソウルは陥ちてしまった。砲弾の轟音に追わ

れ、退却する軍隊と難民でソウルの町は混み合っていた。私は、南に避難するその果てしない行列に加わった。

三時間も歩いたところで、悲しい場面に出くわした。ソウルの南に漢江（ハンガン）という河が流れている。私は小さいときから漢江を知っていたが、これが私や同胞にとって恐ろしい障害物になろうとは夢にも思わなかった。河にかかる橋は、かつては絵のように美しかったが、軍が大あわてで退却する際に破壊してしまっていた。河岸には数そうの小さな川舟が浮んでいた。何百人という避難民がこの小舟を見つけるとまわりに泳ぎ着き、先を争って舟に乗り込もうとした。しかし、そんな小さな舟が、我れ先にと争って乗る人たちの重さにどうして耐えられよう。一そうの舟が沈んだ。そしてもう一そうも沈んでしまった。幸い、舟が河岸からそう離れていなかったため死者は出なかった。

砲弾の音がますます近づいて来たので、私はやっとの思いで河を泳いで渡った。南に向ってとぼとぼ歩いて行くと、驚いたことに河岸にいた人のほとんどが子供たちも含めて、私を追い抜いて急いで通り過ぎて行く。私は、今もってわからないのだが、あの人たちがどのようにして河を渡ったのか想像できなかった。誰か指揮をとった人でもいたのだろうか？　全員が乗れるような大きな舟を見つけたのだろうか？　別の橋があったのだろうか？　漢江の北岸にそんな幸運があの人たちを待ち受けていたはずがない。あの人たちの奇跡的な渡河について私にできる説明は、

人間というものは粘り強くて、決してへこたれないものなのだ、という一言に尽きる。
その後再び、私はこれを同じ真理を実感した。爆撃の脅威があるにもかかわらず、年老いた一人の農夫が畑を耕しているそばを通り過ぎた時のことである。目的地の釜山でも、親や息子や娘を失ったのに、数千人という人たちが生活を持ちこたえ、新しい希望を持ち続けていた。
私は、人間同胞を誇りに思う。そして、再び言いたい。「われわれ人間は不屈である」と。

韓国人・男子学生

三つの印象

I

ある夏の朝

ある夏の朝、私の蜂の巣を見守っていた。蜂が出たり入ったりして、巣は活気に満ちていた。帰ってくる蜂は蜜や花粉で重くなっている。大型の飛行機が着陸するように巣に舞い戻ってくる。出て行く蜂はジェット戦闘機のように軽々と空に舞い上がる。蜂たちが秩序だった社会でそれぞれ任務を果たしている共同生活体というものの繁栄と能率のよさに、私は感じ入った。
突如、動き回る蜂たちの間に起った出来事で、私は自分がロマンチックな観察者に過ぎないことを思い知らされた。一匹の明らかに年老いた蜂が巣から引きづり出され、菊の花木の陰に這い

込むと、そのまま動かなくなってしまった。
今、私は、物質世界の本能的な生き物としての蜂を目にしたのだった。一匹一匹がそれぞれの大事な役目を果たすために育てられる。しかし、自分が生産する量よりも消費する量が多くなると、集団からはじき出されてしまう。すべての構成員の権利や人格に対する敬意に立脚していなければ、人間社会もこの昆虫の社会と変りがない。
夏の朝のほんの短い時間が、民主主義社会を求める私の願いをさらに強くした。

日本人（男）

II

ありのままに

一〇年前、子供だった頃、私たちは横浜に住んでいた。我が家には、田舎から出て来たばかりで海を見たことのないお手伝いさんがいた。ある夏の日、私たちは彼女と一緒に海辺に近い公園に出かけた。広々とした海を見てよほど感動したらしく、彼女はやがてお国なまりに感情を込めてこう言った。「何てすばらしい眺めなんだろう！　ふろしきに包んで持って帰って、お母さんに見せてやりたい」
私はこの言葉を忘れたことがない。それどころか、しょっちゅう頭にぱっと浮んでくる。名高

い人のうまい言葉が数々あるのに、それよりもこのお手伝いさんの言葉が忘れられないのはなぜだろう？　彼女の感動に偽りがなかったからだと思う。彼女は純真そのものだった。

（男）

Ⅲ

十二月の終りに

十二月の終わり、農家の人たちが小麦畑に出ている。身を切るような風の中へ霜の下りた土地から伸び出ようとする若い小麦は、踏みつけてやらねばならない。土壌に根をつくり深く下ろすために――（注・原文はここで切れている―訳者）

二つの想い

Ⅰ

I could wish my wish days to be
Bound each to each by natural piety

―ワーズワース

糸に通した真珠のように人生の日々をつなぐ何か大きな希望がなければ、時がその日々をばら

ばらにしてしまい、日々は失われ、忘れ去られてしまうだろう。一日毎に新鮮な経験がばらばらに寄り集まり、生活に信仰の糸を通さなければ、その時々の状況にもてあそばれ、ある日は幸せ、次の日は不幸せと、運の上がり下がりに合わせて元気になったり、落ち込んだりしてしまう。

雑然とした想念を結び合わせ、一つの人格を作り上げるのは、献身の時である。毎日毎日を結び合わせ、人生に連続性を与えるのは祈りである。毎日の生活を神への思いで縫い通さなければならない。祈りを絶やすことなく、見えざるものとの触れ合いを保つ見えざる糸をたゆまずに織り続けなければならない。この連続性がないと、人生は調和を失い、脈絡がなくなり、目的や意味を失ってしまう。人生という織物を強くするのは、このように神への思いを日々の縦糸と横糸に絶えず織り成すことであり、これで人生は、痛めつけられても、ほつれたり破れたりすることはない。神への祈りと賛美の糸で人生の日々を結び合わせ、絶えざる希望の糸で時と時とをつなぎ合わせよう。

Ⅱ

一九五五年一月二十三日

春節を迎え

花火は、新年のお祭りの雰囲気をつくり出すと思われているが、むしろ花火には何か物哀しい

ものがつきまとっていないだろうか？　その生命は短く、その輝きははかない。男の子たちはその日のために何か月も前からお金を集める。やがて、長い間楽しみにしていた日がやってくる。花火を打ち上げる。花火は夜空に燃え上がり、広がり、そして消えてしまう。闇が戻ってくる。花火が大きければ大きいほど、消えてしまった後に残る空しさは大きい。ロケットが闇夜に高く舞い上がり、砕け散って色彩と光のシャワーとなる。その美しさは余りにもあっけなく消えてしまい、人は物のはかなさをひしひしと感じて取り残される。これが人生を象徴しているのだという考えに、心のどこかで惑わされているからである。人生というのはそんなものだ、色と光と力が束の間舞い上がって、消え去り、闇が訪れ、すべてが無となる、それが人生なのだと唯物論者たちが私たちに信じさせようとするからである。

あるいはそうかもしれない。しかし、イエスは私たちに教えられた、神は世の光、全ての人を照らす光であると。私たちの真心、真正なもの、神のものなるもの、これらを消滅されることは絶対頭から出た言葉は頭を通り過ぎるだけだが、心から出た言葉は心にじかに入ってくる。

中国人（女）

山頂で同じ月を仰ぐ

母は、毎晩ベッドのそばで私のためにお祈りをするのが習わしだったし、日曜日には教会に連れて行かれた。子供のときの私は従順だったのだと思う。しかし、高校に入学したとき、教会から離れてしまったなと感じ始めた。何か赤裸々なものが欲しかった。こうした不満と、会衆から洗礼を執拗に奨められたこと（洗礼を受けるか、受けないかは、個人の自由な意志に委ねられるべきものだと私は思っていた）もあって、私の気持ちは教会から離れてしまった。

当時私は、普連土学園に通っていた。何か月も考えた末に、私はフレンド会、すなわちクェーカーの集会に参加するようになっていた。この会には特定の牧師はいない。集会を聞いて神に仕えるとき、神のお告げを聞いた人がこれを他の参加者に伝達するのである。私は、この会合の形式張らないところ、簡素なところ、真剣さにいたく魅せられた。しばらく通ってから、自分の考えがクェーカー教徒の考え方にますます融合していくのを感じた。教会に行き始めた頃には形式とか形式主義の圧迫を感じたものである。ところが、クェーカー教徒の中にいると、形式が真理と混同することがない。その上、自派の「無形式」と他の団体の形式主義との間に何の矛盾も感じない。

私は、クェーカー派の教義に多くの長所を発見し、この教義を私に最もふさわしい祈りの道であると思った。しかしながら、自分の信仰を表現する方法にはいろいろあると思うし、クェーカーが信じるように、すべての方法が最終的に同じ目標に到達させてくれると信じる。昔の日本の詩人が言ったように、「山の麓から登る道は違っても、山頂では同じ月を仰ぎ見るだろう」。仏

教徒とキリスト教徒は、いずれも多くの教派に分かれているが、その根っこでは同じだと思う。しかし、人が自分の歩いている道を自分にとって最善の道だと信じるのもまた当然である。私はかつて、たどるべき道を選ぶ前にすべての道について知り、試してみたいと考えたが、そんなことは不可能なだけでなく、無意味なのだ、結局同じ場所にたどり着くのなら。

このことを私は経験から学んだ。私は自分の状況に照らして自分に適した道を選んだつもりだ。率直に言って、まだその道を登り始めてはいない。道にたどりつこうと野原をいまだにさまよっているところである。しかし、何かの力におされて、常にどこかに行こうとしている。ある人はこれを「内なる光」の力と言う。その力の源泉が何であれ、人は山に登らざるを得ない。そうするのがその人の運命なのだろう。ならば、勇気をもって進まなければならない。私は、独りで登らなければならない。たとえ何回ころんでも、ダルマ起こしのように立ち上がらなければならない。近道はしたくない。精一杯、努力すれば、誰もがいつかその道を発見できると信じたい。ゲーテが「ファウスト」で言っている如く、たとえ一時、道に迷うことがあっても、私は、どれが私の道か知っている。頂上にたどり着くまで、山道を登り続けようと思う。

日本人（女）

Ⅰ　大学院課程の開設

教養学部が仕上げに近づきつつあったところで、本来の目的のうち、さらに、二つの目的を達成すべく、教育学と行政学の大学院課程を開設するときが来た。設置申請書を作成する手順は、教養学部の場合と同様であった。私たちは、すべての要件を満たすように慎重を期した。ファカルティーの質、プログラムとコースの詳細な説明、すべての要件、図書館の充実などである。設置申請書が設置審議会で審議されるかどうかについては、若干の不安があった。大学院教育学部研究科の科長に予定されていた日高教授が聞いたある審議会委員の見解によると、最初の新入生が教養学部を卒業する年に大学院を設置するというＩＣＵの申請は、まるで、「小さな子供が爪先立ちしてテーブルの上の物を覗き見しようとしているようなものだ」ということであった。審議会が申請書を受理し、実地検分のためキャンパスを訪問するように、どのような説得が行なわれたのか私にはわからないが、とにかく審査が実施され、許可が下りた。これにより、最初にめざした三つのプログラムに向って、私たちは大きく前進した。

J　治癒と回避—成長期の苦しみ

私たちは成長のための苦しみを味わった。ＩＣＵのファカルティーは、様々な経済的、文化的背景を持つ人たちであった。給与や住まいの面でその違いが出た。

支給通貨を日本円に換算して比較すると、日本人教授の給与は米国人、カナダ人、英国人教授に比べて非常に少なかった。韓国人と中国人の学者の給与は、その日本人に比べても甚だしく少なかった。また、英国人学者の給与は、米国人学者と比べると少なかった。

英国人学者の給与などを決めるについては、駐日英大使館の文化担当官を通じて手続きを進める必要があった。文化担当官を通じて送付した最初の申し出では、イリノイ大学から来た社会学教授とほぼ同額の給与を予定していた。文化担当官はこれを送り返してきた。「申し出のあった予定の給与を支払ったら、英国の大学で最高額の給与をもらっている教授よりも高額になってしまう」という。そして、その教授に妥当と考えられる給与額を示してきた。

異なった経済的、文化的状況で生活を維持していくことになる様々な経済的、文化的背景の人たちの給与を、どのようにしたら均質化できるかという問題は、国際関係の面からも意欲をそそ

られる仕事であった。行政当局では、給与スケジュールの策定について助言をしてもらう目的で、様々な国籍の委員から成る委員会を設置した。その結果、得られた基本方針は、十分に妥当という考えを盛り込んだものであった。ＩＣＵは、日本の他の大学や海外の大学からすぐれた教授を「買い付けて」いるわけではない。われわれの目的、われわれの希望は、国際基督教大学が日本に貢献するべき分野で重要な業績を挙げているすぐれた教授を招くことであった。彼らに来て欲しいのは、彼らがＩＣＵのような革新的なプロジェクトに関心を持っているからである。この二つの条件を合わせると、十分にして妥当、という方針がこの問題の解答であると思われた。

三年間滞在の予定で海外から来たファカルティーの子弟は、アメリカンスクールに通わなければならなかった。日本語ができずに日本の学校に入ったのでは、三年の遅れが出てしまう。アメリカンスクールの授業料を支払うには、自国で教えている日本人教授の給与とは大分異なった額の給与が必要であった。三年間の契約をして三年後に、あるいは、一〇年か一五年後に帰国を予定している海外からの教授は、社会保障やヘルスケアに備えて、しかるべき調整や手当を必要とした。

日本人のファカルティーにも教育を要する子弟がいたし、日本での社会的な生活保障が欠かせない。当時まで日本の親の生活保障は、長子または他の家族の責任であり、かなり最近では、生活保障の主な出所は、毎年六月と十二月の末に支給される給与ないし二ヵ月分のボーナスとなっ

ていた。従業員は退職するときに、勤続年数をもとに計算される退職金を受け取る。ファカルティーの生活保障と福祉厚生が様々な面で異なっていたところから、ＩＣＵは国連のひな形に等しかった。上記の委員会と行政は、給与に関する諸方針を案出したが、これらはファカルティーと職員から理解され、概ね受け入れられた。

もう一つ解決すべき問題があった。キャンパスでのファカルティーの住まいの問題である。典型的な日本人ファカルティーの住宅には、キッチン、トイレット、それに多目的の畳部屋がある。ＩＣＵのキャンパスでは、各ファカルティーの住宅は、その家族の出身文化の重要な側面が反映できるようにすべきであるという一般的な方針が定められていた。また、すべてのファカルティー住宅には、学生やファカルティーの集まりをもてなすのに十分な広さのリビングルームなり、多目的ルームを設けることになっていて、相当標準化した部屋になる予定だった。他方、ベッドルーム、キッチン、トイレット、メードの部屋、洗濯・乾燥室は、住人の希望で改造ができた。日本人ファカルティーの多くは、多目的ルームに畳を敷くことを希望した。暖炉を希望する人もいたが、不要という人もいた。日本人ファカルティーの大部分は、米国人ファカルティー宅のキッチンに似たキッチンを選んだ。セントラルヒーティングを希望する人がいたが、希望しない人もいた。メードの部屋についても同様であった。だが、学長は、諸々の文化を最大限に同化させた形の住宅を計画した。すなわち、リビングルームは半分を約二〇インチ高くして畳を敷

き、座布団を置くことにした。他の半分は、木の床にカーペットを敷き、椅子とテーブルを置くことにした。こうすれば、畳に座る人と椅子に座っている人が、お互い同じ目の高さで話ができる。ＩＣＵでは、すべての国のすべての代表が同じ目の高さで語り合おう、という持論を学長は強調されていたが、この設計は、学長の考えを非常な説得力を持って示した例証といえた。

成長に伴うもう一つの痛みは、行政とファカルティーと学生の関係に生じた。大方の日本人は、終戦後、自分たちの指導力に幻滅を感じており、この幻滅感とそこから来る不信感とが、行政のすべての面を覆っていた。ファカルティーは、大学の行政当局に不信感を持つ傾向があった。学生は、その双方に不信感を抱く傾向があった。これが、民主主義の目標とプロセスを学ぶ実験室としての大学の発展に協力する中で、私が直面した問題であった。そして、それは、権威主義から民主主義への移行の道程にある社会の問題というだけでなく、自分たちの指導力への信頼がなかなか育ちにくい社会における問題でもあった。

ファカルティーと共に私は、各学科のファカルティーがコースとプログラムを策定するという考え方の浸透に努めた。すなわち、ファカルティーが選任したカリキュラム委員会がプログラムの内容と性格を調整し、その提案をファカルティーに報告し、ファカルティーがこれを妥当と認めれば、行政当局がファカルティー政策とプログラムの実施を支えることによって、ファカルティーと学生に奉仕するのである。

私たちは学生との関係についても同様の方針に従った。最初の一〇年間、私は学務の他、学生問題担当の副学長を務め、ファカルティーの中から各寮担当の寮アドバイザーのなり手を求めた。伝統的な日本の寄宿舎であれば、学生は問題が生じると、これを舎監に持ち込み、舎監はこれを上へ、上へ、上へと首脳部に上げていき、首脳部はその問題について決定を下すと、これを下へ、下へ、下へと学生に接するスタッフに下ろしていき、スタッフが学生にその決定事項を伝達するという形をとる。

私が導入しようと努めたのは、寮アドバイザーが政策決定に参加し、その責任において政策を実施する権限を持つという手順であって、これは学生にとっては納得しにくい手順であった。その原理を実例で示してみよう。通常、授業料、寮費、食費の値上げは、各行政部門の代表からなる幹部会に諮った上で学長と副学長が決定する。その決定は、理事会に上程されてその承認を受ける。ある時、財務担当副学長がこの手続きを踏まずに寮費の値上げを理事会に諮ったことがある。私は、財務担当副学長にメモを送り、寮費値上げ案を学生に説明する責任を負っていただけるなら、私は値上げ案に反対しないと伝えた。彼からは、責任を負うというメモが返ってきた。ところが、不幸なことに、財務担当副学長は、健康上の理由（それが彼の生命を奪う結果となった）で日本を離れざるを得ず、学生たちは値上げ反対の動きを組織してしまった。

学生たちは、私に寮費値上げ案を説明するように要請してきた。私は値上げそのものに反対する気はなかったが、その決定が財務副学長以外の同格の副学長を迂回してなされた、そのやり方に批判的な気持ちを持っていた。けれども、コンボケーションで学生に説明を行なうことを承知し、値上げの根拠、正当性について、まず私自身が納得した上で、この事柄を学生たちに説明した。最初に、今回の値上げが大学での経済活動を日本の経済活動と足並みを揃えるというＩＣＵの方針に適合したものであること、第二に、大学は学生たちに対し、寮費の値上げによって生じる経済的な問題のために学生が大学を去らなければならないようなことは絶対にないようにする、という二点である。

値上げ反対のリーダーたちは、それでは満足しなかった。彼らは、学長から正式な説明をして欲しいと要求してきた。学長は正式な説明の文書を作り、そのコピーを学長補佐を通じて私に届けてきた。それを読んで、私は静かにこう言った。もし学長がこれを公式文書として学生に発表するのなら、私としては辞任せざるを得ない。この文書に異存があるわけではなく、文書の内容そのものは結構だと思う。ただ、学長が私に対して、学生たちに説明するように求め、私がその説明の内容について事前に学長と合意に達したとき、初めてそれが正式の説明文書と言えるのではないか。この意見を学長に伝えて欲しい、とその補佐に述べたのである。今、学長がなすべきことは、学生に対し「トロイヤー副学長がコンボケーションで行なった説明が正式な説明である。」ということだけであった。私はＩＣＵの副学長として日本に一〇年間滞在したが、その間、

問題を上へ、上へ、上へと上げていって回答を得、今度はそれを下へ、下へ、下へと下ろし、各レベルの職員を単なる連絡係にするようなやり方を変えるように努めた。そして、ＩＣＵでは、各アドバイザーなり、各行政職員に対し、それぞれのレベルにおいて政策や方針の設定と実施に関与する責任をもたせるという方法をとった。

政策の実施、すなわち、政策への奉仕（サービス）を旨とすべき行政の例をもう一つ挙げれば、私の考えがさらにはっきりするだろう。大学創立以来、三隅氏は体育科長兼学務事務部長を務めていた。大学が進退するにつれて、体育の授業で氏が多忙になってきたため、新しい事務部長が必要となった。幸い私たちは、日本のフルブライト委員会で秘書をしていた有能な女性を任用することができた。この女性は、単位取得の記録や学生の成績証明書の重要性を十分理解している人だった。彼女が着任してまもなく、ファカルティー・アドバイザーたちが教授会の学生人事委員会を通じて、二学期の評点を、学生が三学期の履修科目を登録する前のアドバイザーとの相談に間に合うよう、アドバイザーに報告するよう申し入れた。日本ではよくあることだが、教授が最終試験と期末論文に評点をつけ、これを学籍係に報告するのに一ヵ月か二ヵ月、長い場合は三ヵ月もかかる。そこで、学生人事委員会では、カリキュラム委員会に二学期の評点を四十八時間以内に出すようにと提案した。この評点が直ちにアドバイザーに報告されれば、学生が三学期に科目登録するときには、アドバイザーの手元に評点が届いているという手筈になる。提案はカ

リキュラム委員会と学生人事委員会で承諾された後、教授会に提出され、その承諾を得た。

ところが、二学期の終了時、かなりの評点の届け出が迅速におこなわれなかったので、学務事務部長は、評点をもたいに教授たちのところに出向いた。次の教授会で、私は、ファカルティーたちが口々に彼女のことをこきおろしているのをふと耳にした。彼女は自分の立場を弁えていない、評点を取りに来るとは―というわけである。事情が読めたので、私は彼らに、教授会の報告書のファイルをよく見てみるようにと言った。ここで説明を要すると思うが、毎月、教授会終了後、各メンバーに謄写刷りの報告が配布されることになっていた。彼らは専門のバインダーにこれを綴じ込み、このバインダーを次回の教授会に持参する。こうすれば、ファカルティーたちは、いつでもこれまでの教授会の記録を手元に置いておける。さて、私はファカルティーたちに、これこれの日付、これこれの決議番号の教授会記録を読むよう求めた。全員が読み終ったところで、私は言った。委員会が方針を作成し、教授会がこれを承諾し、行政がこれを執行するという時、それは何を意味しているか、その実例がこれなのだ、と。学務事務部長は、あなた方がそうしましょうと教授会で決めたことを言われた通り忠実に実行しただけなのだ、と。みんなの頭が動き始めた。横にではなく上下にである。その教授会の後、私のところにやって来たファカルティーたちは誰もが、私が執行という言葉で意味しようとしたことがよくわかったと言っていた。行政当局は、方針の実施のために力を尽くすのである。サービスに当たる日本語は、このよ

うな広い意味を有しない。召し使いが主人に仕えるといった意味で使われる。この経験で全員が大いに理解を深めることができた。様々な国から来た専門職の人たち同士が、ごく普通に用いられる言葉の意味に微妙な差があるために、何年間にもわたり意見の疎通を欠いてしまうというのは、実に驚くべきことである。国際的な事業のパートナーたる者には、各自の役割を見極め、理解し、受け入れる忍耐強さが必要であろう。

学生問題担当副学長と学生とが、それぞれの役目について相互の信頼と理解を深めるために、妻と私は毎月第一月曜の夜、学生会の役員を自宅に招待して夕食を共にし、その後、インフォーマルな話し合いを行なった。話し合いの目的は、次々と生じる小さな問題を解決することではなく、双方が合意できる共通の目標、これらの目標に適う方針、目標の遂行に当たって両者が協力できる方針を見出そう、ということにあった。共通の目標が明確になれば、ＩＣＵ学生会と全学連（全日本学生自治連合会）との関係がどうあるべきかという問題も解決できる。当時、全学連の幹部は、共産党寄りの傾向が著しかった。他大学の状況を調べたところ、全学連は、傘下の学生自治会がその目的を達成するのを支援するというより、むしろ自らの目的のために各自治会を利用していることがわかった。全学連の影響は、学生間に分裂を生み、目的遂行に向けて暴力化する傾向を見せていた。

学生会の役員とこのように緊密な関係を数年間にわたって保ってきた後のことである。ある日、私の日本人助手が、ＩＣＵの学生会執行委員長宛ての葉書を私の部屋に持って来た。ある法律の制定に抗議する国会前の行動に参加するようにという、全学連からの招請状であった。彼女がどうしましょうかと言うので、私は、「すぐに学生会の執行委員長に渡しなさい。何時、いかなる場合でも、学生宛ての郵便物を途中で抑えるのはよくないことだ」と答えた。

学生会の執行委員長が私の部屋に来ると、彼女はその葉書を彼に手渡した。彼はそれを読むと、肩かごに放り込んで、「そんなことにつき合っていたら、この大学での私たち自身の目的を達成する時間とエネルギーがなくなってしまいますよ」と、言った。この言葉は、私たちと学生たちとの建設的な協力関係が達成されつつあることの証左であり、心強い限りであった。

もう一つ、学生たちが持ち出した問題の解決に学生たちを関与させるようにした例を挙げてみよう。副学長が幹部会の承諾を得て、燃料費の値上がりを賄う目的で寮費の値上げを提案したことがあった。学生の反応は値上げ反対であり、寮費問題に対処する委員会がつくられた。私は委員会のメンバーに会って、値上がりの理由を説明し、これが既定の方針に合っている点についても述べた。私はまた、ＩＣＵの予算には、この値上げで寮費が払えなくなるおそれのある学生に対する援助資金が計上してあるから心配はない、と伝え、もし学生側が実施可能な代案を考えついたら、学校当局に必ずこれを検討させると提案した。

セントラルヒーティングを備えた学生寮は、当時の日本ではまだ珍しかった。熱を保つには、

換気について解決すべき問題が多かったのである。日本の伝統的な住宅にも集中暖炉がなかった。家族が使う部屋とか使用中の部屋の一部を木炭の火鉢で暖めていた。その後、電気ヒーターを火鉢の中に置くようになった。住宅は、居間を南向きにし、窓をできるだけ大きく取るようにして建てられていた。天気のいい日は、この窓を開けて、太陽の熱で直接、部屋を暖める。他の部屋は、必要な時だけ火鉢で暖めていた。

ＩＣＵでは、寮の集中暖房を一一月初めに入れ、三月の末に切るという方針を採っていたが、学生たちは、暖房を一一月半ばに入れて、三月半ばに切るという案を持って来た。管財課長がこの案による燃料費の節減額を計算したところ、燃料コストの前年比アップ分とほぼ同じだった。学生委員会がこの代替案について学生の賛否を問うたところ、学生達はこの案に賛成した。当局はこれを暫定的な措置として受諾した。学生会の厚生委員会が調査して、その年の一一月の前半と三月の後半に、これまでの年より寒い日が著しく多かったり、学生の間に健康上の問題が生じるようであれば、この代替策を中止するという決定であった。

この問題処理の過程で学生たちは、大学当局が自分たちと一緒に問題を考えることができ、しかも、考える意志があるということ、また学生の経済的な問題と同様に健康にも心を配ってくれていることに心強さを感じたのであった。

当時はＩＣＵも、全学連による共産党の影響から自由ではなかった。全学連は、一部のめぼし

い学生に活動家になるように働きかけていた。これらの学生が誰であり、その目的と考え方が共産党の指令に沿った確固たるものであることはすぐ判明した。彼らに対処する最善の方法は、民主主義の目的とプロセスをあくまでも追求すること、つまり、もしもそのうちの一人とその家族に経済的問題が生じ、授業料が支払えない事態になっても、他の学生と全く同様に、その学生に奨学金委員会への援助申請をさせる、ということである。学生援護委員会のメンバーが、このような学生への援護を拒否したがったこともあったが、その時でも私たちは、政治あるいは宗教上の所属は考慮に入れず、学生を財政的に援助するという既定の方針を堅持した。行政担当者もファカルティーも、そして、学生さえも、頬を打たれても黙って相手を受け入れている自分に気づくことがよくあった。

学務および学生問題担当副学長として勤務した一〇年間に、日本の経済は年を追うごとに、著しく変化していった。諸大学の行政当局に不信感をもたらすような急激な文化的変動もあった。そして、この不信感と、文化的変動に影響された直接行動主義が、あちこちの学園で増大していった。その一〇年間、ＩＣＵでは公然たるスト、ボイコット、学内暴力は皆無であった。何回かスト発生の恐れはあったが、学生の間のスト賛成の意見は、問題が公開の場で討議され、また学生たち自らが問題解決のためにファカルティーや当局と協力するよう求められると、立ち消えになっていった。

K　日米関係について学ぶ——平和と武装放棄

私が最初に学んだことは、九〇〇機に及ぶB二九爆撃機が、一九四五年に横浜と東京の上空に飛来し、焼夷弾と破壊用爆弾によって、その後、八月に広島と長崎に投下された二つの原子爆弾よりも多くの生命と財産を奪い、破壊した、という事実である。日本の国民は、軍部の操作によって、米国の飛行機は撃墜され、米国の海軍は海の底だと信じ込まされていた。五月二十八日の大空襲の後、日本国民は軍部からだまされていたことを知った。日本国民にとっては、その時点で戦争は終っていた。事実、降伏の条件は、天皇の退任という米国の要求を除いて、すでに合意ができていた。それにもかかわらず、広島と長崎に原子爆弾が落とされた。日本人同僚は、広島と長崎の原子爆弾で平和を求める国民の声が急速に高まったために、一九五三年の現在、より多くの人が生命を失わずに済んで、こうして生きていられるのだ、という点で意見が一致していた。もし戦争がもっと続いていたら、連合国と日本の兵隊の間で山から山へ、谷から谷への国土荒廃の戦いが繰り広げられていただろう。

しかし、もう一つ、私は重要な事実を学んだ。終戦に関する日付けや出来事を全部正しい相関

関係に置いてみると、原子爆弾を投下した人たちは、投下以前に戦争は自分たちの勝ちだということを知っていた。そして、東洋の日本以外の国々や世界各国の人々は、原子爆弾を落した人たちがそれを落とす前に自分たちの勝利を知っていた、という事実を知っていた。この歴史の事実からいって、米国の同盟国を含む他の国々の人々には、今われわれが最後の手段として原子力兵器を使うつもりだと言っても、容易には信用してもらえないだろう。われわれ、すなわち米国は、この原子爆弾の投下と共に軍拡競争を始めた。今や米国は、現在もなお自分がいかに重大な核準備競争の煽動者、火つけ役であるかを理解し、認めない限り、軍備拡張競争解消の有効な担い手になることはできない。

一九五二年の平和条約調印以降、在日米軍は、占領軍ではなく、安全保障条約に基づく安全保障のための軍隊となった。この最初の安全保障条約は、一九六〇年に期限が切れることとなっていた。一九五九年に、米国は安全保障条約の有効期限到来後の日米関係について日本と交渉を始めた。どういうわけか、私は米国大使館に招かれ、米国から来日した軍の高官、文化担当者を含む大使館職員、在京の海外報道員や実業人たちと話しあったことがある。

ワシントンから来た将校たちは、安全保障条約の期限切れに伴い、日本は防衛力を強化して自らの安全保障にこれまでより大きな責任を負うべきであるという見解を述べた。表面的にはまったくの正論であった。日本はもはや発展途上国ではなかった。海外の市場ではすでに競争力をつ

けていた。米国が日本の安全保障に全面的な責任を負ういわれは、いまやなくなったようにみえた。これからの日本は、自前で自国の安全保障をはかるべきであった。

しかし水面下を見てみると、次のような重視すべき状況があった。マッカーサー元帥の顧問たちの監督下でつくられた日本の戦後の憲法は、その第九条ではっきりと、「国民は・・・・・武力による威嚇または武力の行使は、・・・・これを放棄する。・・・・陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」と宣言した。日本国民がこの条項に反対しなかったのは、もっともな理由があったからである。日本国民はかつて、軍部にだまされ、利用され続けてきたので、軍部の指導者たちの復活をいまだに恐れていた。同じ理由で、日本国民の九〇％パーセントが、日本の軍部増強は必要ない、と考えていた。この国民の恐れは、米国占領軍が日本に対し、有罪の判決を受けた第二次大戦時の軍幹部を釈放して自衛隊を指揮させるように、と勧告したとき、さらに増幅した。一九五〇年に北朝鮮軍が韓国に南進し、対馬海峡を隔てて日本までわずか六〇マイルという地点に達したときのことである。

さらに、日本では、平和国家が生き残れる証を世界に示すという、国民的な目標が広範に広がっていた。この一九五九年六月の米大使館での会合で、私は前後三回にわたり、もし米国が日本の軍備増強を迫ったら、国民が立上がり抗議行動を起こすだろう、と説明に努めた。私はさらに、日本人口の一・五パーセントを占める共産党寄りの人たちが、そのすぐれて組織的な指導力

によって、国民的な軍備反対の声を利用し、自らの地位と計画を前進させるであろうと述べたが、私の意見はまったく無視されてしまった。

日本にいる米国国務省の役人、軍関係者、さらには財政や報道界の多くの人たちが、定められた居住地に住み、日本人社会とは政府と国際的なビジネス界を通じてしか接触していないことを私が知ったのは、この時である。彼らが、世論を形成する人たちから直接情報や知識を手に入れることはほとんどなかった。

私たち一家は、九ヵ月の休暇を得て八月に日本を離れた。この九ヵ月間に、日本に防衛力の増強を迫る米国の圧力が原因となって、日本では大衆的な抗議運動が高まった。

やむを得ず最後の手段として、人気の高いドワイト・アイゼンハワー大統領が訪日して首相に会い、日本にかなりの防衛力増強を要求する安保条約の改定を支援することになった。これが日本国民の怒りを買い、大衆的な抗議運動が幕き起こったため、結局、アイク訪日は中止された。米国のテレビ、新聞、雑誌は、この抗議行動は共産党の指導と扇動によるものだと報じた。この見方は、その後、完全に誤りであることが判明したが、米国のテレビ、雑誌、新聞が勇気をもって前言を撤回、あるいは訂正するということはついになかった。

しかし、証拠というものは明々白々にして否定のしようがない。首相は辞職を余儀なくされ、総選挙が行なわれたが、共産党の獲得議席数はこの一〇年来で最低の数に落ち込んだ。共産党員

自身は勝利したと確信し、農民の間に代表を送り、共産主義グループの組織化を進めた。ところが農民たちは、即座にこの代表者たちを東京に追い返した。農民たちには、共産党の指導者たちと関係を持とうという意志などなかったのである。一九六〇年八月に日本に戻ってまもなく、私は大使館の文化担当官に会ったが、彼は開口一番、「いつ大使館にいらっしゃいますか？『私の言った通りだろう？』とおしゃりに」と言ったものである。

このエピソードがあった頃の駐日米国大使はマッカーサー元帥の甥のダグラス・マッカーサー・ジュニアであった。後にエドウィン・O・ライシャワー博士が駐日大使に任命されたが、日本国民についての両者の理解はすこぶる対照的だった。日本に生まれた博士にとって、日本語は母国語同然の言語である。日本史と哲学の教授を務め、ハーバード大学東洋学研究所（Institute of Oriental Studies）の指導者の一人であった。博士は、米国に対して広い次元で日本のことを説明し、また日本人に対しても広い次元で米国のことを説明できるという点で前例をみない人であることがほどなくわかり、このことは日本に実に強い印象を与えた。博士が英語で講演をしていたとき、日本人通訳が博士から間違いを正されたことがあった。この出来事は、日本の新聞で大きく取り上げられた。米国としては、日本語の内容について日本語の達者な人を正すことのできる初の駐日大使を得たのである。

失業者を増やすことなく予算を均衡させること

日本の産業界や社会団体の管理者たちは、予算の不足を補うため従業員を解雇することでそのまとまりを瞬く間に壊してしまった。予算を均衡させる手段としては、失業者を増やすのではなく、むしろ一括賃下げに甘んじるというのが、長年の伝統的な慣習であり、事実広く受け入れられてきた方針である。その結果、労働者と使用者と政府の間の協力関係が最大のものとなる。私のみるところ、米国の状況とは非常に対照的である。米国では、労働者、使用者、政府の間の敵対的関係が最大化している。この対照的状況については、第Ⅲ部「帰国したミッショナリーの役割」の項でさらに詳しく取り上げる。

L　大学財政基盤の維持

前記の五ヵ年財政計画は大学に大いに役立った。しかし、一九五七年には、資金の需要はどんどん増えていた。当時の日本はもはや発展途上国ではなかった。一九五五年から五六年にかけて休暇で帰米していた期間、私は一九五〇年にICUのための募金キャンペーンが成功した各都市を廻って、ICUの現状を報告した。テネシー州メンフィスでは、最初のキャンペーンで四万ドル強の募金に成功した。そこへも報告に行ったところ、空港で私を迎えてくれた人がこう言っ

た。「ようこそおいで下さいました。私たちは大学の発展に関心を寄せています。けれど、私たちの教会からの今後の寄付金が限られたものになることはご承知おき下さい。ここは織物の町ですから。日本から米国に何百万ヤードもの綿織物に綿ブラウスが入ってきており、ワシントンでメンフィスの労使の代表が、輸入規定量の引き下げを折衝中なのです。」

教会寄付の直接の行く先は、今や、もっと援助の必要な第三世界の国々に変っていた。諸教派の無指定の寄付についても同様であった。ミッション・ボードが任命した教授に対する援助は、速やかに行なわれていた。JICUFの婦人委員会および男子委員会は、特別なプロジェクトを援助し、ICUは米国の主な財団や日本政府の関係機関から相当額の助成金を受け始めていた。六〇年代初めにはICU農場が非常にすばらしいゴルフコースに変った。このゴルフコースは、ICUの学務予算に年最高二七万五〇〇〇ドルの収入をもたらした。一九七四年には、ゴルフコースの一部地、一一〇エーカーを一一万ドルで売却した。これと他のいくつかの小区画の土地が、重要な基本財産となっている。

M　宗教生活と宗教活動の推進

ICUでは、開学当初から、学生、ファカルティーとその子弟、地域の人たちのために日曜学校が運営されていた。管財課長の細木氏と遠藤氏がこの世話を始められた。最初は、多目的ビルであるフィールド・ハウスの一室が集会場であった。本館が完成してからは、その四階のラウンジに毎週日曜日に集まるようになった。ミネソタ州セントポールでかつてバプテスト教会の牧師をしておられた政治史教授ブリンジョーンズ博士がこのグループ活動の精神的リーダーであった。

アイオワ州の諸教会が、ICUのキャンパスに新しく教会を建設するという大事業を引き受けてくれた。そして一九五三年秋までに教会建設資金を集め終わった。この時点で湯浅学長は、教授たちが所属する一七の教派の代表からなる委員会を設置したが、これには、日本人教授たちの間で非常に強力なグループである「無教会派キリスト教徒」を代表して篠遠博士が参加された。このグループは、キリストの教えには全面的に従っているが、会員に対してあれこれと教義を処方する教会や教会組織にはいささか敬遠的な態度をとっている。

ブリンジョーンズ博士がこの委員会の委員長に就任した。第一回の会合で、博士は各委員に、ＩＣＵキャンパスにできる新しい教会について、それぞれがどんなイメージや希望を抱いているかを尋ねた。長時間にわたって興味深い話し合いが続き、ついに結論はでなかった。第二回の会合までにも何度か話し合いが行なわれ、一般に認められている信条を掲げるのは賢明でないということが誰にも明らかになってきた。そこで委員会では、「ＩＣＵ教会は、キリストの精神において神と人を知り、これに奉仕することを真剣に追求するすべての人に開放されるであろう」。という声明を採択した。これは、組織された諸教会や教派が一般に採用しているメンバーシップを意味していた。しかし無教会派キリスト教徒にとっては若干問題があった。この問題の解決のために何度か会合がもたれ、いろいろな意見が出された。一九五四年五月に挙行される教会堂の献堂式とフェロウシップの聖別式が約二週間後に迫ると、いよいよこの問題に決着を付けなければならなくなった。無教会派の人たちは、教会憲章の中にメンバーシップという言葉を入れることに強く反対しているわけではなかったが、有組織教会に属している人たちは、無教会派の人にとってこの言葉がけっして気持ちのいいものでないことを知っていた。憲章が教授会に提出され、承認を受けようとしているときだった。ムーア博士が図書館に行って、オックスフォード大辞典を持って戻ってきた。そして私たちに「affiliate」（提携）の項を読んで下さった。「交際によって仲間に引き入れられること、通常は、会員を意味するが、必ずしも会員を意味するとは限

らない」とある。あいづちと笑みが教授たちの間に広がり、満足と賛同の意が表明された。憲章に「membership（所属）」でなく「affiliate（提携）」という言葉を用いれば、誰もが受け入れられる。このようにキリスト教を志向する人たち同志が和を保ち合うことによって、ＩＣＵ教会は真の信仰の場となった。

以下は献堂式での湯浅学長の挨拶の一節である。

「今や本学は、学問の自由を完全に感得し、同時にＩＣＵの宗教の中心としての責任を深く認識した教会を持つに至った。宗教がその最良の状態において、かつその精髄において、宗教の自由の原則を侵す恐れなくＩＣＵの教育生活の中できわめて重要な役割を担うであろうことを、われわれは確信してよいであろう」

年々新しいファカルティーがキャンパスにやってくるたびに、このような教会の意義について質問がなされ、私たちはそのような教会にした理由と経過をたびたび説明しなければならなかった。そして、教会は、キャンパス内外の奉仕活動の中で成長していった。

キャンパスの外に手を伸ばした初期の例としては、自然科学科の篠遠博士が指導する学生たちがサマーキャンプを組織し、科学と宗教との関係に関するメッセージを携えて東北の諸教会を訪れた例である。もう一つ、私にとって今なお重要な意味を持ち続けている出来事がある。教会には、大学とは独立しているが部分的に重複している委員会がある。妻がＩＣＵ教会委員会のメン

バーだったとき、ある学生メンバーが、教会の牧師兼学生担任者に向って、非常に礼を失した暴言を浴びせかけた。帰宅したとき、妻は非常に心を痛めていた。私はその学生のことをよく知っていた。学生会の役員をしたことのある学生だった。翌日、私は牧師に、昨晩のことについて私がその学生と話し合ってみようかと尋ねてみた。すると、彼は、「そういうことはなさらないで下さい。その理由を申し上げますと、私は昨年の夏、学生の東北キャラバンに同行しました。その折にあの学生は、証しをし、キリスト教の意味について語りました。その夕方、彼はキャラバンのグループに、学生会の役員をやっていた時、トロイヤー先生を怒らせてやろうと思ってあらゆることをやってみたが、先生は怒りをもってそれに応じるということをなさらなかった、と話していました。私は、あの学生が私のことを同じように試しているのではないかと思うのです」と答えた。

キリスト教徒が一%にも満たない国にあるＩＣＵの学生たちは、私たちにこう言い続けてきた。「私たちは、あなた方が何を言うかではなく、あなた方がどんな人で、どんなことをするかに、より強く心を動かされます」これは、キリストを神であり主であると明言するすべての人にとって、きわめて効果的な試練になるのではないかと、私は考えるようになった。おそらくこれは、キリストが「あなた方は私のことを主よ、主よと叫ぶが、なぜ私が教えたことをしようとしないのか？」と問われたときに語ろうとなさったことではないだろうか。

教会は、その手をまずインドのネパール、タイ、フィリピンに、最近では中国、韓国、そして何と米国にも差し伸ばしている。教会のこうした全体的な発展にとって重要だったのは、初期にChurch Boardが採択した方針である。ＩＣＵ教会の牧師は、人文科学科のファカルティーを兼任するという規定である。牧師は、人文科学科の宗教担当ファカルティーに属し、宗教と一般教育を含むプログラムの、特に宗教に関わる部分を担当することとなっている。こうすれば、牧師はすべての新入生と接触を持てる。牧師は、この他キリスト教史に関するコース（必修科目ではないが、選択が強く奨められる）にも責任を持つ。

学生を対象としたチャペルサービスは週に一回行なわれた。出席は義務づけられていない。このため、このプログラムを計画した人々に、学生に出席を促すための動機づけという仕事が課せられた。チャペルサービスと日曜教会サービスではファカルティーを招いて説教をしてもらうことになった。これは、自然科学、経済学、心理学の教授たちがそれぞれの学問分野で宗教概念とどのように取り組んでいるかを明らかにする好機会であると考えられた。教授たちが学生たちの前でその心を赤裸々にすることによって、学問と宗教が一つになった。そういうことがなければチャペルに行くことのないような学生が、自分の教授が説教をするときには出席するようになり、ひいては他の教授が説教するときにも出席する見込みもでてきた。これによって学生は、専門的思考と神学的思考を結びつけ、双方を全体的に把握する機会を与えられた。

N　ICU建設の努力は報われたか？

おそらくICUは、「知恵と才能と、そして神と人への愛において成長した」と言えるであろう。教会は、キャンパス、地域社会、そして日本の国境を越えて手を差し伸べ、成長していった。リンドストロム博士は、ICUに着任してすぐに、農村厚生研究所を発足させた。これがやがて社会科学研究所に発展し、今日なお隆盛である。中国で教えておられた栄養化学の教授クロード・トンプソン博士は栄養学研究所をつくった。人文科学科の武田（長）清子博士はキリスト教と文化研究所を設立した。教育学の教授たちは教育研究所（IER）を設立した。IERの初期の出版物の一つに小島教授の著書がある。教授はロックフェラー研究助成金を得て、〝日本における民主教育のための哲学的基礎〟と題する講義摘要を作り上げた。小島教授が、当時、ICU訪問中のアーノルド・トインビー博士に、この講義摘要について批評を求めた日のことを、私はよく覚えている。批判的ながら、熱意のこもった批評であった。

小島教授が日本の教育学者グループにこの講義摘要を指示したときのことも覚えている。私はわざとその会合には出ず、あとで教授に謝ったところ、彼はこんなことを話してくれた。「お出にならなくてよかったですよ。最初の二時間、教育学者たちは、講義摘要の考え方について、何をもとにしたのかをいろいろ質問をしてきましたが、最後にその一人がこう言いましたよ。『私たちは小島教授に多くの質問をしました。その大部分が、この講義摘要に盛られた考え方の出所と内容がどの点で米国からの借り物であるかはっきりさせる目的のものでした。しかし、そのような証拠は結局、見つかりませんでした。この講義摘要により、私たちは、民主主義の原理とわれわれの社会の最良の目標との間に密接な関係を見つける機会を与えられました。その機会を受け入れ、私たちに何ができるか考えてみようではありませんか』」

教養学部に最初の学生が入学してから五年後の一九五九年に、私はICUのファカルティーの出版物をリストアップしてみた。専門誌、書籍、会報、教科書などに合計一六三点の著作があった。

最初のクラスが一九五七年に卒業したが、多くの学生が大学院進学を希望した。ICUは、日本ではもちろん大学として認められていたが、海外の大学単位認定機関からはまだ認められていなかった。そこで私は、ICUのプログラムについて一頁の陳述書を作成した。入学した学生の学力水準、ファカルティー、教養学部と大学院課程の説明、学生の語学力を記述したものである。学生たちはその授業の三〇ないし四〇％を第二言語である英語で受けていた。それから私はその一頁の陳述書の下部にスペースを設けて、その学生が卒業生の中でどんな位置を占めているか、

英語でいくつのコースを履修したかなどを記述し、成績証明書に添付した。やがて、コーネル大学大学院の部長から手紙が届いた。それには、「貴校が米国で単位認定校の指定を受けていないのは事実ですが、プログラムの説明と学生の成績証明書で、私どもとしては、ＩＣＵからの志願者の入学を、むしろ公認の大学の場合よりも確信をもって認めることができると思います。」と記してあった。米国の大学院に入学願書を提出した学生が全員認められ、しかも、その大部分が、大学院助成金や奨学金を得て実際に大学院に入学できたということは、特筆に値する。自然科学専攻の学生は大学院の助成金を得やすかったが、人文科学と社会科学の場合は比較的難しかった。

一九五七年から一九八五年までの間に、ＩＣＵは、オーストラリア、カナダ、フィンランオ、フランス、ガーナ、香港、インド、インドネシア、日本、韓国、パキスタン、ペルー、フィリピン、スリランカ、タンザニア、米国、ベトナム出身の若い男女に学士の称号と修士の学位を授与した。一九八五年には、ニューヨークの財団がＩＣＵ同窓生が就いている職場のポストについて下記のデータを提供してくれた。このリストは、完全なものではないが、これによって、機能的実践的英語力を有し、広い一般教養と専門的、学際的な学問を身につけた学生に開かれている職場の種類を知ることができる。

ＩＣＵの教養学部、大学院卒業生の職場とポスト

キリスト教関係

東京神学大学、学長

アジア農村教会、スタッフ

エルクホーン・ルーテル教会（アイオワ州）、交換牧師

パヤプ大学（タイ）、牧師

秋田高陽教会、牧師

アジア・キリスト教会議、スタッフ

イリノイ・パストラル・サービシーズ・インスティテュート、牧師カウンセラー

ロサンゼルス・ユニオン・チャーチ、牧師（日系）

医学関係（海外）

笹川記念保健協力財団（アジアの救ライ活動を援助）、常務理事

サザンカリフォルニア大学メディカル・センター、ボビット遺伝生化学研究所長

ベル・ラボラトリーズ、コンピューター研究者

イリノイ州エルクハート郡保健省、衛生官

マスコミ関係

東京放送、ニュース部ディレクター

日本放送協会〝海外ウィークリー〟ホスト

共同通信社、主任特派員（在シドニー）
国際視聴覚労働組合連盟、副理事長
ロイター通信、通信員
ワシントンポスト、通信員

ビジネス関係
日本経営者団体連盟、調査部長
ソニー・コーポレーション、副社長
ＩＢＭ台湾、会長および社長
アメリカン・ホンダ・モーター・カンパニー、社長
日本航空、モスクワ支局長

国際連合関係
ユネスコ地域教育局（アジアおよびオセアニア）、局長代理
世界銀行、上級プロジェクト・エコノミスト
人口研究基金、アジア・太平洋支局長
ＥＳＣＡＰ・プログラム調整およびモニタリング局長
ユニセフ、上級プログラム・ファンディング・オフィサー

国連年鑑、編集員
環境プログラム、連絡員
政治および安全保障カウンシル・アフェアズ省、政治担当オフィサー
開発科学技術センター、科学問題担当準オフィサー

大使館領事館関係
ブラジル、ビルマ、中央アフリカ共和国、中国、エジプト、フランス、韓国、スリランカ、トルコ、米国、ユーゴスラビア

政府関係
東京地方裁判所、判事
労働省、課長（初めての女性課長）
ウェストバージニア州知事・上院議員
香港政庁、労働局次長
カナダ国立森林研究所、研究員
ウィスコンシン州産業労働人材省、スタッフ

大学教育関係
教職員

ＩＣＵ
東京大学
香港大学
チャイニーズ大学
ガーナ大学
サンアンドレ大学
ハーバード大学
ジョンズ・ホプキンス大学
プリンストン大学
エール大学
トロント大学
ワーテルロー大学
パリ大学
スイツァランド・オーストラリア国立大学グラジュエート・インスティテュート・オブ・インターナショナル・スタディーズ
ニューサウスウェールズ大学

その他
国連大学、翻訳官
コーネル大学、東アジア担当図書司書
ＭＩＴ、研究員
（一九八五年現在）

これらの第一回およびその後の卒業生の活躍ぶりをみて、エドマンド・ライシャワー大使は、「ＩＣＵの卒業生は、短期間のうちにすぐれた教育の成果として認められるようになり、ＩＣＵが、規模ではなく、その質において日本の高等教育のリーダーとして今日、享受している高い名声を獲得するのに貢献した」と語っている。

○　日本滞在最後の四年間

ＩＣＵの副学長として一二年（企画段階の二年間とプログラムをスタートさせてからの一〇年）を経た一九六二年、私は学務および学生問題担当副学長の辞任を申し出た。ＩＣＵの大学教育が学生の価値観に与える影響について研究するための若干の時間が欲しかったためである。

ＩＣＵの卒業生でコロンビア大学の博士課程を修了した大和田博士とスタンフォード大学で博士号を得たＩＣＵの心理学教授原博士、それに二人の大学院生と私は、学部在学中に学生の価値観がどう推移するかを四年間にわたって調査することを企画した。ここで価値観というのは、行動の活力となり、それを方向づける発達の一局面のことである。

三種類の主な調査記録表があり、私たちは全般的調査記録表として、チャールズ・Ｗ・モリスの『一三通りの生きかた（Thirteen Ways to Live）』＊を利用した。これには、役割見解（Role Views）、人生観あるいは価値観（Value Orientation）など、様々に呼ばれているものの断片あるいは局面として一三通りの生きかたが、それぞれ七五ないし一〇〇語のパラグラフに記述されている。学生には、それぞれに対する自分の反応に合わせて、「非常に好き」から「非常に嫌い」まで七段階に順位づけするように頼む。

この一三通りの生きかたは日英両語で印刷されていた。

注＊Morris, Charles W., Varieties and Human Values, The University of Chicago Press, 1956.

一三パラグラフの各要点は次の通り…

一、人類が獲得した最高のものを保存する

二、人と事物の独立性を培う

三、他人に対する同情的関心を経験し、示す

四、お祭り的生活と孤独な生活を交互に経験し、示す

五、グループ参加を通じて行動し、生活を楽しむ

六、変化する状況を絶えず支配する

七、行動、享楽および思索を統合する

八、健康的に、のんびりと楽しんで生活する

九、静かに受容的態度で待つ

一〇、禁欲的な生活をする

一一、内的生活を黙想する

一二、冒険や行動に賭けてみる

一三、普遍的な目的に従う

さらに、ＩＣＵの経済学と政治学の教授および数人の東京大学の教授と協力し、かつモリスの調査表に類似したパターンを用いて、政治経済的生活の見方を記述した六項目のパラグラフを開発した。この六項目のパラグラフは、それぞれ以下のことが中心となっている。

一、国家ファシズム

二、管理資本主義

三、理論マルクス主義

四、政治経済的プラグマティズム
五、漸進的社会主義
六、厳格な個人主義

同様に、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教、仏教、神道、儒教の学者との共同作業を通じて様々な宗教観を記した九項目のパラグラフを開発した。

一、自己規律としての仏教
二、神道
三、生き方としてのキリスト教
四、儒教
五、混合宗教（ヒンズー教）
六、救いの道としてのキリスト教
七、スコラ哲学者的無神論
八、科学と宗教の調和
九、救いの道としての仏教

私は四年間にわたる調査の詳細は報告（＊）で読者を煩わせるつもりはない。だが、学年が一年生から四年生へと進級していくにつれ、人生を見る社会観、経済観、宗教観の間の関連性がだ

んだん多くなるという点は興味深い。簡単にいうと、学生たちの価値観は、区分化の程度が遥かに薄れていた。

一年生の一学期には二八項目の間に二一種類の重要な相関関係が見られ、三年生三学期には四九、そして四年二学期には六六もの重要な相関関係が見られた。社会、宗教および政治的価値パターン（一六―二八）内部内の相関に比べて、社会と宗教間、社会と政治間、には多くの重要相関が表れた（〇―三八）。定量的に見て、このことは、価値の性質や意味の理解にかなりの変化があること、また個人の構成概念を明確にすることが不可能であることを示している。調査の終了時点で、この変化がどの程度、一年次、三年次、四年次と、次々テストを受けていくうちにテスト自体からある程度の先見を得てしまった事実に原因しているのか、はっきりしたことはわからなかった。

＊詳細については、土橋信男博士の博士論文「A Longitudinal Study of Students Values＝Secular, Religious＝Ethical and Politico＝Economic」(Syracuse University｜九七四）を参照されたい。

P　ICU卒業生の追跡調査

卒業生がICUの教育内容をどのように評価しているかを調べるのは至当なことであろう。一九七四年に、私は妻のビリーと共に日本に戻り、原一雄博士、原喜美博士、大学院助手田中清彦君と一緒に、ICU卒業生の追跡調査をおこなった。ICUのプログラムを二一の項目に分けて、その重要性と有用性について卒業生がどのように評価しているかを、できるだけ明らかにするのが目的である。高等教育セミナーのメンバーがアンケートの整理と郵送を手伝ってくれた。アンケートの目的を説明し、回答を依頼する手紙は、学長名で送付した。五四七通の回答が寄せられた。

ICUプログラムの二一の項目のうち最も重要と考えられたのは、語学訓練と機能的2ヵ国語能力の習得であった。四三パーセントの回答がこれをきわめて有用、三五パーセントが非常に有用、一七パーセントがまあまあ有用であると答えていた。五一パーセントが語学プログラムをきわめて重要、二七パーセントが大いに重要、一九パーセントが重要と答えていた。語学訓練要件についてそれほど重要でない、もしくは重要でないと、評価した卒業生は、二、三パーセントに

過ぎなかった。世界の大学が注目すべきデータであろう。

図書館が2位であった。ICUの図書館は、日本で初めての開架式自由閲覧図書館である。蔵書はほぼ半数が和漢書、他の半数が洋書、雑誌は四〇パーセントが外国の洋雑誌、六〇パーセントが日本語の雑誌である。三〇パーセントの回答者がICU図書館について、きわめて重要、二九パーセントが大いに重要、一七パーセントが重要と答えていた。

プログラムのうち最も有用かつ重要と評価された一〇項目のうち、主なものは、寮生活、様々な国の教授や学生たちと共に過ごした経験、専攻学科での教員との交流、および経済援助に関連のある項目であった。最低の評価を受けた項目には、宗教プログラム宗教体験、進路指導、学生会、カウンセリング・サービス、学内新聞などがあった。

キャンパスでの宗教プログラムと宗教体験が低評価だったのは、驚きであると同時に憂慮に耐えない結果であった。八パーセントの回答者がきわめて有用、一三パーセントが大いに有用、三九パーセントがまあまあ有用、と評価していた。合計すると約六〇パーセントである。一五パーセントの回答者がきわめて重要、一七パーセントが大いに重要、そして三二パーセントが重要と評価していた。合計約六四パーセントである。見るところ、期待通りの評価を受けていなかった。

一期生から四期生までの回答を調査したところ、キャンパスでの宗教体験は、その後の卒業生の場合よりも高い評価を受けていた。この点は、統計データの解釈上、考量すべきであろう。入

学選考委員会では、志願者の宗教的背景については、入学基準に適うとは判定されるまではいっさい考慮に入れないのが慣例であった。その結果、最初の四年間に入学した志願者の二五ないし二九パーセントがキリスト教徒であった。キリスト教徒であり、大学がキリスト教主義の学校であるということで相当数の優秀な学生が志願してきた。最初の学生が卒業したとき、全員がいい進路に就くことができた。翌年、志願者数は三倍に増えたが、入学手続きを終えた時点で、キリスト教徒はわずか一一パーセントであった。ＩＣＵを志願する学生が増えてきたのは、キリスト教主義に立つ大学であるからではなく、卒業生の進路が非常によかったからであった。最初の五年間の学生のうち、宗教プログラムを重要かつ有用と評価した数は、次の五年間のクラスや一九六九年から一九七四年のクラスよりもずっと多かった。これは、大学にとっては新しいチャレンジとなった。ＩＣＵは、その目的に忠実なら、入学条件に宗教的条件を含められないことははっきりしている。ここで付言しておきたいことは、ＩＣＵのキャンパスで生じた問題は、すべて新しい大学であることから生じたものであり、避けて通れる問題ではなかったということである。本書の中で、このことについてふれておきたいと思ったことがたびたびあった。

一九六六年に、ＩＣＵと共にあった一七年間の生活に別れを告げ、妻と私は、今度は、逆の使命を帯びたミッショナリーとして重要な任務を果たせるという確信をもって、米国に帰って来た。ところが、この任務は予想以上に厳しく、失意に満ちたものとなった。その経験については、

次の部で報告する。

次に掲げるのは、ＩＣＵを去る直前におこなった私の講演である（ＩＣＵ教育研究出版から採った）。

Ｑ　大学教育における信頼の果す役割

モーリス・Ｅ・トロイヤー

（これは、妻との帰国を前に、私がＩＣＵ創立一七周年を記念するコンボケーションの冒頭におこなった講演の草稿である。）

昨日調べものをしていて知ったのですが、アダムとイブがエデンの園を去るとき、アダムはイブに、「私たちは過渡期を生きている」と言ったそうです。

妻と私は、過渡期にいる。
ＩＣＵは、過渡期にある。
世界は、過渡期にある。

それが続いて欲しいと思う。
リンゴを大いに信じよう。
リンゴは、やはり、とてもおいしい果物だ。

お別れには普通どんな挨拶をするものなのか、私にはよくわかりませんが、コンボケーションでこの信頼という言葉を協調することが、本学の性格に則ったものであったことはわかっています。また、先週の宗教強調週間のテーマは、信頼でありました。したがって、今日は、大学における信頼の役割について論じるのが適切かと思われます。

大学については歴史的に二つの定義があります。ユニベルシタス・マジストロルム・エト・スコラリウムとユニベルシタス・ユニベルサリスの二つです。ユニベルシタスには目的があり、ユニベルサリス、すなわち、人類の普遍的な経験の真理と宇宙の真理に関わる諸々の事実、諸々の力、諸々の原理を扱います。これらは（大学の）本質を成すものであり、ユニベルシタス・マジストロルム・エト・スコラリウムとは、その制度のことであります。

最初からそうであるように、近代の大学の本質は、真理であります。現在も、当時と同様、私たちは真理を信頼しなければなりません。真理を発見する最善の方法を信頼しなければなりません。真理を学びとる最善の方途を信頼しなければなりません。つまり、次善よりも最善を信頼しなければなりません。真理こそ信頼の基礎なのです。私たちが決定を下す根拠が正しいか否かは、一に真理にかかっているのです。

まず的確な真理を求めることなしに問題を解決しようとする個人や集団に対して、私たちは当然、懸念を抱きます。このことは、それぞれの責任分野および双方に共通する責任分野を持つ行政担当者と教授についても当てはまりますし、学生が学問を追究するとき、また大学の行政に参画しようとする場合にも当てはまります。と言っても、私は、学生が行政に参加しようとするのを否定しているのではありません。学生が成熟するためには機会が必要です。私が言いたいのは、教育に関与する者は、最初に的確な真理を求めることなしに問題を解決しようとするなら、教授であれ、学生であれ、行政者であれ、その評価を高め得ないだろうということであります。真理を求める前に闘いを求めるなら、大方の場合、問題は解決されません。

以上のことから大学の性格について論及できると思います。ユニベルシタス・ユニベルサリスである他に、大学は、ユニベルシタス・マジストロルム・エト・スコラリウム、つまり教師と学生のギルド組織であります。現代の大学ではそうではなくとも歴史的にはそうでした。過去の三年間に少なくとも二回、この演壇から歴史家がこの定義について述べ、ボローニャの学生が教師を雇ったり、首にしたりしたことに言及されました。ところで、この言い方は、残念ながら正しい史実を伝えているとはいえません。第一に、ギルドの歴史で、徒弟が親方を首にした例はまず

ありませんでした。ボローニヤでは、学生は、徒弟だったので、学生でいる限り、親方が一人前のギルド組合員にしてもいいと判断するまでは、徒弟のままでした。ギルド組合員としてギルドに留まっていれば、いずれは学者として認められたのです。

ボローニヤは、学者のコミュニティでしたが、非常に漠然とした意味での共同体でした。学生は教授に料金を支払えば、その教授のところで勉強ができました。学生が支払いをしないからといって、その教授はコミュニティをお払い箱になるというわけではありませんでした。一人か二人は支払いをする徒弟がいるかもしれないからです。また、各自の目的に応じて大学共同体に留まることも去ることもできました。また、大学は学生の記録を保管する必要がなく、医師、法律家、教師などの資格認定機関もありませんでした。教授自身が法律だったのです。学生は支払うも支払わないも自由でしたが、支払うことなしに学生でいることは許されませんでした。

学生の平均年齢は、三〇歳ないし三五歳でした。学生たちが組織化されていたことも確かであり、事実、ボローニヤには二つの大きな学生組織があって、食住などの施設をめぐって張り合ったり、争ったりしていましたが、そのうちの一つは、外国人—イタリア以外の国から来た徒弟の組織で、二つの組織は、会員数が大体同じでした。歴史の伝えるところによると、これらの組織のお陰で学生たちは実に興味ある生活を送ったようです。二つの地域がほぼ同人数だったため、なおさらそうだったのでしょう。だからといって、ＩＣＵの学生の半数を留学生にすべきだとい

うわけではありません。

しかし、私が強調したのは、ボローニヤであれ、どこであれ、ギルドは、徒弟が親方から自由を奪い取る場所ではなかったという点であります。ギルドは、自由を自ら努力して勝ち取る場所でした。そして、これこそが今日の大学の本質なのです。

何世紀も前に比べて、現代の学生たちは、より多くの自由をよりたやすく手に入れるようになっていると思います。また、ＩＣＵの学生は、ほぼ無制限の自由と自治を、たとえば寮生活において獲得できます。もっとも、学生たちが自由に伴う責任について学ぶ意欲を持ち、これらの責任を全面的に引き受ける気構えがあればの話ですが。このような自由や責任は、学生がその自由に伴う責任を受け入れ実践しなければ失われてしまうおそれがあることも確かです。なぜなら、信頼されるためには、自由に伴う責任を引き受けなければならないことが明白だからであります。

日本の大学にはギルド組織の痕跡が残っています。これは主にヨーロッパから渡ってきたもので、一九四五年までは多くの点で日本にとって役立ちました。一九四五年以来、日本は急テンポでヨーロッパを飛び超え、若い国民に資する高等教育の機会が拡大しました。しかしながら、ギルド組織は、この拡大する目的に役立つには非常に機能が鈍い。ギルドというのは、ギルド内の人口過剰に杭してギルド組合員を守る機能をも持っているからであります。ギルドは、厳格なク

ローズド・ショップであります。そして、日本の主だった大学の大学院は、四〇〇校から五〇〇校に及ぶ戦後の新しい大学のためにすぐれた教授陣を準備する責任などまったくないかのように、一九四五年以来ギルドの伝統に従って行動しています。

このことは、真理が高等教育の内容や本質の場合と同様に、制度についても重要な意味を持っていることを十分物語っています。制度に対する信頼は、内容に対する信頼が真理に依拠するのと同程度に、真理に依拠しています。

しかし、私たちは、この真理をどうしたら手に入れられるのでしょうか？　真理とは、発展するものであることを私たちは知っています。真理とは発見されるものであり、新しく生まれるものであり、新しい真理に吸収されるものであります。真理が真理であるという確信を、私たちはどのようにして得るのでしょうか？。主として、状況を通じてであり、最も特徴的な状況、最も試練に耐え抜いた、最も伝統的な、最も信頼できる状況は、学問の自由という状況であります。すなわち、真理を白日の光から遠ざける障害、あるいは真理がその正当性について試され、試し直されるのを防げる障害がないという確信の得られる状況であります。

一ヵ月前のコンボケーションでこの論題が取り上げられました。この論題に関し、ＩＣＵに直接、関連する点を若干、補足して述べてみたい。本学は、国際基督教大学であります。国際的ということとキリスト教とは、その意義において全く相反する二つの問題を生み出しています。キ

リスト教志向は、学問の自由に抑止的要因として作用する危険があり、国際的志向は、非常に広範にわたるので、国家的文化的な伝統の尊重に見せかけた抑止のターゲットになりかねない。

もしＩＣＵの宗教的志向がキリスト教の教義について疑問を抱き、これを分析し、批判する自由を妨げるとしたら、本学の大学としての統一性に不信を抱く正当な根拠ができることになります。ＩＣＵの宗教的志向が他の宗教についての研究とか関与を妨げるとしたら、ＩＣＵは、学問の自由に背を向け、大学としての統一性への不信を誘発することになります。大学の宗教的志向が世俗的なイデオロギーの研究を妨げるとしたら、ＩＣＵの統一性が欠けることになります。

国際的志向が学問の自由に対する文化的、国家主義的な防衛抑止を成功させてしまうとしたら、もはやユニバーサリスは本学の特徴ではなくなり、ＩＣＵは大学とはいえない存在になってしまいます。

他方、ＩＣＵは政治的機関ではありません。創立以来、一貫して、学生とファカルティーが共に民主主義の価値とプロセスを学び、体験する機会をもつ、実験室たらんとしてきました。私たちはこの実験室では、政治システムについて論じるのではなく、人間の基本的諸概念について論じているのであります。

ということは、各人の価値と統一性に対する信念を意味し、各人がその能力を最大限に伸ばす権利を有するのだという確信を意味しています。そのためには、各人がそれぞれの能力に応じて

自由に考え、信じ、話す自由を持たなければなりません。学問の自由は、個人の価値についてのこの概念の延長線上にあり、真理を探求する教師と学生が考え、信じ、話す自由が、つまりは学問の自由なのです。

これらの価値にコミットしつつ、ＩＣＵは個人―すべての個人―の価値と自由を守り、伸ばす人間関係の最も有効なプロセスを求めることにも取り組んでいます。大学では、すべての個人の中に、学生、ファカルティー、行政の各人が含まれています。

しかしながら、これらのプロセスは、大学や行政当局、ファカルティー、あるいは、学生が政党化したり、政党の支配下に入ったりすることがなくして初めて、きわめて適切なかたちで達成されます。

この点について説明したい。違いはごく微細ですが、非常にはっきりしています。

ファカルティーと学生は、「内集団」からの圧力や妨げなしに、自分が見たままの真理を求め、表現する自由を持たねばなりません。学問の自由を政治的支配から守る最も確かな方法は、大学の機関としての行政当局、教授会、学生会が非政治的な存在になるという方針を採用することであります。政治に関係しないことによって、これらの機関は政治的干渉から学問の自由を守ることができるのです。たとえば、教授会は、いかなる政治的な問題についても、私の意見を代弁してくれるような教授会であって欲しくはありませんし、政治機関として私とは異なる立場で私を代

弁するような教授会であって欲しくありません。つまり、私は、自分が賛成であろうとなかろうと、いかなる政治的な問題についても、教授会が私の代弁者にならないよう主張する必要があります。と同時に、行政職員やファカルティーや学生が一人の市民として、あるいは一政党員として、政治行動に参加するに当たっては、いかなる制約もあってはなりません。大学はこうした政治参加を奨励すべきであっても、禁止すべきでないと私は固く信じています。ただ、政治的な問題について発言するときには、市民として発言しているのであって、行政、教授会を通じて大学を代弁したり、または学生を代弁して発言しているのではない。この区別は、学問の自由が市民の自由を超えたものであるとみなせば、はっきりします。学問の自由は努力して手に入れた自由であり、真理を解釈する枠を権力者が強制的に決めてしまうような組織に学者が参加すれば、失われ、取り上げられてしまう危険性のある特別な自由なのであります。

ここで手短かにもう二つ問題点を取り上げてみたい。学問の自由は、他の自由と同様に、それに応じた責任を伴うものであります。その責任の一つが、真理を追求するために努力することであります。学問の自由は寛容でありますが、いつまでも改まらない無責任な態度―真理に対する誹謗、放縦、軽率さ―には尊敬も払わないし信用もしません。このような態度を取り続ける人は自分自身だけでなく、知的共同体から軽蔑され、信用されなくなります。

第2点は、学問の自由に責任を持つ人たちが、自由を破壊するために自由を利用する個人や集

団を疑問視し、信頼しないのは当然だという点であります。これは、イデオロギーや圧力団体の信用度をはかる重要な基準になります、言論の自由を破壊するために言論の自由を利用する個人や団体は、目的が手段を正当化する—目的や意図が正しければ不誠実さや契約違反も正当化される—と信じていますが、これでは、個人や団体、ひいては国家同士の間に不信感が生じてしまいます。

さて、ここで滞日一五年の間、私にとってずっと気がかりだったことに触れてみたい。具体的には、学生と行政当局、学生とファカルティー、ファカルティーと行政当局の間の信頼の問題であります。時間が限られているので、この二〇年間に行政当局に対する広範な不信感を生み出し、日本や私の国で見られる若い人と大人のごく普通の緊張関係を徒らに高めるに至った様々な出来事について振り返って見る余裕はありません。しかし、私の接した同僚や学生、出来事のようすから察して、この不信感は、基本的に権力や権威を動因とした行政に接してきた伝統や経験に起因していると思われました。

私がこれまで述べてきた民主主義の基本的な価値、また小島博士が、「日本における民主的価値の概念化」と題する講義要綱で述べている民主主義の基本的な価値では、行政を、権力や権威ではなく、奉仕の精神に動機づけられた役割を持つものとして想定しています。またアリスティデスは、全体的な視点に立って、「屋根のきれいな家並や頑丈な石造りや壁でもない、運河や造船

所でもない、都市を造るのは。自分たちの機会を活かす力のある人たちが都市を造るのだ」と言っています。民主主義社会におけるリーダーとは、他の場合では切り開けないような、可能性のある道を選択し、切り開いていく人—熱心なサービス精神を持った人であります。

本学創立後の一〇年間、行政当局はサービスを旨に熱心に努力してきました。それがどの程度成功したかは、私が云々することではありません。あらゆる状況においてサービス中心の行政に徹するにはどうしたらいいのか、率直に言って私にはまだわかっていません。この目標に向って進むには、不断の努力が必要であり、私たちは立ち止まることなく、常に歩を重ねていかなければならないでしょう。私は、現在の行政当局はサービス中心の行政をめざして良心的に、熱心に努力していると自負しております。

ということは、行政当局は、ファカルティーや学生を、利用すべく手段ではなく、奉仕すべき目標とみなしていることであります。もっと具体的には、次のことを意味しています。

a) 行政当局は、質の高い教育のための人的な資源を確保するべく努力して来た—十分訓練された、国際色豊かな教師から成るファカルティーと学生の比率は一対一〇である。これはお金のかかる教育であって、学生一人当り三六万円かかる。そして学生一人が支払う授業料は約七万二〇〇〇円である。つまり、行政当局は、学生一人につき二八万八〇〇〇円の費用を学外から手に入れなければならない。これはたやすいことではない。時間と努力を要する。この金額を学外か

ら得るには、寄附金の提供者に対し、学生、教授陣、プログラムが寄付の対象に値するものであることを説得できなければならない。これを行なう当局は、当然、教授陣を利用すべき手段ではなく、奉仕すべき目的とみなしている。

b) ＩＣＵに入学できる能力のある学生が純粋に金銭的な理由だけで入学を妨げられたり、在校生が退学を余儀なくされることがないように、という方針を支えるために、初年度の一九五三年に奨学金として二〇〇万円を予算に計上した。この予算額は、毎年増加し、昨年は、経済援助金が二一〇〇万円となった。行政当局では、ＩＣＵの定期収入の範囲を超えて、この資金を確保したのである。

c) 一四年間に、ＩＣＵ図書館の蔵書は一二万五〇〇〇冊に達した。この五〇年間に設立された平均的な私立大学での蔵書数の二倍である。ＩＣＵの年間平均の書籍、雑誌の予算は、学生一人当り約一万八〇〇〇円となっている。図書館のため年に学生一人当り五〇ドルを支出しているカレッジや大学は数少ない。これもまた学生やファカルティーに対するサービス精神の表われである。

d) この他にも、一年生からやり直さずに自由に専攻を変更できる便宜などである。大学としては、教育プログラムを変更したい学生に対し、一年生からのやり直しを求める方がもうかる。サービス精神中心の行政が行なわれている根拠は、日本で最初の学生組合のために資金を調達し

たところにも表われている。もう一つの根拠は、批判の自由を禁止しないという方針に徹していたことである。

今後、誰かが、行政当局が威圧的であるとして、そのことについて書いたり、話したりするのにこの自由を使うとしたら、「当局はどのような面で学生を奉仕すべき目的というより利用すべき手段とみなしていくか？」と問うてみるのは、ユニバーサリスの性格に適ったものとなるだろう。そういった面もいくらかはあるかもしれない。いくらかは現に存在する。しかしながら、「どんな面で当局は学生やファカルティーを奉仕すべき目的として遇してきたか？」と問うまでは、私たちの行政当局が実際のところどんな行政当局なのか、判断できない。こうした問いかけをして初めて、バランスシートができ上がる。

私は、根拠のある批判を抑えようとは思いません。正当な批判は望ましく、必要であり、またサービスを旨とする人たちから感謝されるものです。そのような批判は奨励すべきであります。妥当な批判は、公開の対話集会であり、大学新聞であり、個人的な会合であれ、文書でれ、直接かつ率直に出された場合には、めったに不信感を惹き起こさないものです。しかし、根拠のない、無責任な、遠回しの批判は、批判される側の、そして究極的には批判する側の人格の統一性をそこない、結局、相互不信を惹き起こします。このような批判は、結局のところ民主的とはいえません。行政職員が学生やファカルティーの価値を軽視したり損じたりするとしたら、その行為が

非民主的であることは、私たちの誰もがよく知っています。しかしながら、行政職員の統一性と価値観を破壊するのも、同時に非民主的なのです。彼も一個の人間なのですから、無責任な批判を受けたり、不可能なことを要求されたりすれば、傷つき、害なわれることがあります。

不可能なことを要求し、期待するとはどういうことなのか、一つの例を挙げてみましょう。一方では資源（人的、動的）の増加や給与の引き上げを求める教授陣からの圧力、他方では学生の諸費値上げ反対運動、いずれも当局を板挟みにし、いずれも話し合いに非常な時間を要し、その分、当局が学外の資金源を開拓する時間やエネルギーがなくなってくるわけです。

私は率直かつ具体的にお話ししたい。ＩＣＵは、今日が創立記念日でありますが、当時の状況に応える的確な目的を掲げて創立されました。これらの目的は今なお意味を持っています。しかも、そのうちのいくつかは、さらに明確になり、今日性を増し、まさに、決定的ともいえる目的となっています。偏見の是正における教育の役割、教育における信頼の占める位置、学生、ファカルティー、行政の間の、より健全な関係が進展する中で学問の自由が果たす任務、これらは国際基督教大学という実験室の試験管の中にある元素であります。誰でもこの実験室に入り、実験の触媒になれる。そこで出来上がる製品は、より豊かで、より充実した生活において、より明確な目的、より強い熱意、そして、より大きな力量を備えた個人や団体であって欲しい。お互いが相手をその役割において利用すべき手段としてでなく、奉仕すべき目的として、みるような個人

や団体であって欲しい。ＩＣＵのこの役割は、一〇年前よりももっと重要になっているように思われます。

心理学者は、価値を態度、感情、情動の領域内で作用するものとみなしてきました。ＩＣＵにおける価値研究の結果によると、価値というものは、感情領域（感性）における活性化、方向づけの構成要素であり、認識的領域（理性）における方向づけの構成要素であるということがはっきりとわかる。認識的ないし理性的なものが感情的ないし感性的なものより優勢なところでは、信頼と安定性が高くなることもはっきりしています。これは、主に、認識領域で作用している価値は真理の探求、評価および活用を基礎にしているのに対し、感情領域での価値作用は、その質（たち）に適合しない真理を回避しようとする傾向があるからであります。これは、大学が業績を誇れる理論的研究と応用研究のいわば辺境を成すものであり、ＩＣＵには、このような大学になる力があると思います。

要するに、信頼は真理に対する何物をも恐れない信念によって育まれます。逆説的ですが、信頼は、真摯な疑問を抱いて真理に挑戦する中で生まれる、ということであります。大学においてファカルティーと学生が取り組んでいるもの、それが真理なのです—真理を、それが信頼に値するかどうかつきつめて確認することが、学生とファカルティーが取り組んでいる内容なのです。しかし、信頼は制度にも依拠しています。ここでは真理は、人間関係における手段と目的に関

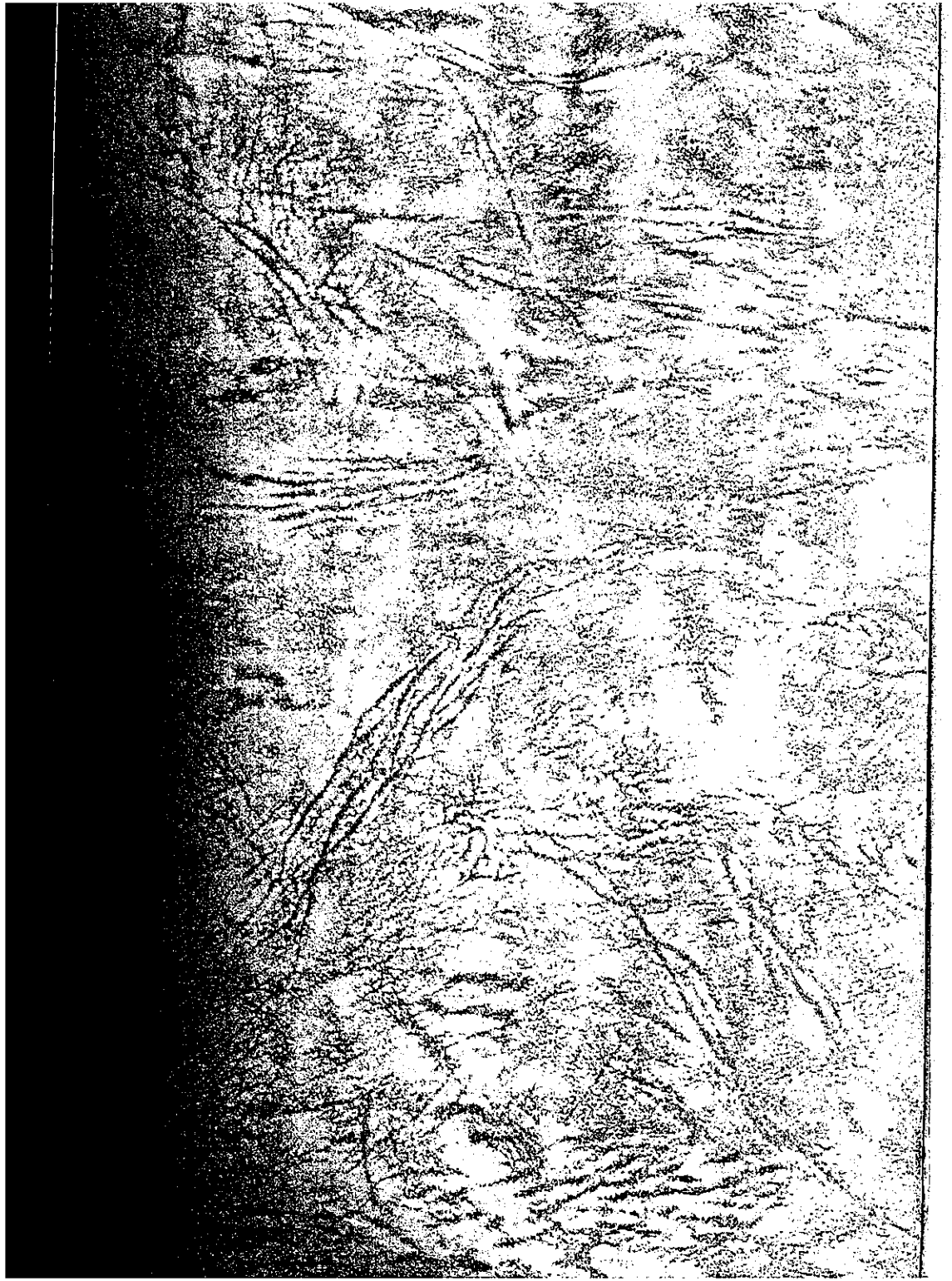
わってきます。真理はその今日的な妥当性を、手段と目的の形成に作用する価値から得ているのです。

マスロウは、その著『宗教、価値および至高体験』の中で「現代の究極の病は、価値のないことである。この病は、史上かつてないほどの致命的な危険をはらんでいる」と言っています。

真理は、道具であります。私たちには信をおける道具が必要ですが、真理だけでは十分ではありません。それには方向づけが必要です。ブルーノ・ベッティルハイムが言っているように、「ハンマーは美しい礼拝堂を造るのにも、頭をたたき割るのにも使える」のです。マスロウはさらに、こう言っています。飛行機のテストパイロットがテスト飛行に出て、本部に無線で連絡してきて、「どこを飛んでいるのか迷ってしまったが、今、新記録を樹立しつつあります」と言ったそうです。笑話のような話ですが、核兵器戦争でこんなことが起るとなると話は深刻です。見当違いの不信から生まれる争いにしてもそうです。ＩＣＵは建学の目的に基づき、諸々の社会に行政への圧倒的な不信感を克服する方途を示せるような行政、教授、学生の関係を是非とも実現するよう、自覚をもって努力するべきであります。大学であれ、国家であれ、リーダーが効果的なサービスを提供できる相応の信頼関係なしに、その最高の可能性をきわめようとするのは、どんな社会にとっても困難なことであり、人的の資源を浪費であります。

最後のパラグラフを書き終えたところで、「サタデー・レビュー」の五月二十一日号が届きま

した。教育欄に、かつては黒人だけのカレッジだったが、一九五五年以来、人種差別になったウエストバージニア州立大学についての記事が載っています。「人間関係の生きた実験室」というタイトルです。ＩＣＵがその責務と性格のあらゆる面―国際的であること、キリスト教的であること（キリスト教的なものに対するキリスト教徒としての態度だけでなく、神が、いかなる宗教の子であれ、そのすべての子を通じて話される教義に対するキリスト教徒としての態度を含む）、学術的であること（教授と学生の学問の自由、これに関わる人間関係を含む）―における機械的でダイナミックな「人間関係の生きた実験室」になること程、ＩＣＵにとって意義あることはありません、是非ともそうなって欲しい。ＩＣＵはいいスタートを切りました。実に多くのチャンスに恵まれ、学ぶべきことも多い。ＩＣＵがすぐれた「人間関係の生きた実験室」として、ますます発展しますように。これが私の、ＩＣＵに対するはなむけの言葉であります。妻と私から、このまたとない機会の最後に当たり、祈りの言葉を述べさせていただきたい。ＩＣＵに入学するすべての人が受ける教育と精神生活の恵みが、私たち二人がこれまでに受けた恵みと同様に豊かなものでありますように。私たちが受けた恵みのすべてに対し、私たちはＩＣＵのすべての同僚と一人一人の学生諸君に、いついつまでも感謝の気持ちを持ち続けるでありましょう。学生の皆さんご静聴ありがとう。



モーリス・E・トロイヤー（Maurice Emanuel Troyer）　略歴

1903年（明治36年）　米国イリノイ州マックリーンに生まれる
1924年（大正13年）　米国ブラフトン大学卒業
1935年（昭和10年）　米国オハイオ州立大学でPh.D.を受ける
1945年（昭和20年）　米国シラキュース大学教育評価センター所長
1940年（昭和15年）－1943年（昭和18年）
　米国教育審議会教員養成委員会委員
1943年（昭和18年）－1949年（昭和24年）　米国公立学校，大学，その他，教育機関の評価問題に関する顧問
1945年（昭和20年）　米国シラキュース大学教育評価センター所長
1949年（昭和24年）5月　国際基督教大学建設委員として来日
1950年（昭和25年）－1962年（昭和37年）
　国際基督教大学学務副学長
1962年（昭和37年）－1966年（昭和41年）
　国際基督教大学法人評議員，
　国際基督教大学学生価値観研究室主任教授
1966年（昭和41年）　米国に帰国

国際基督教大学史(資)料－Ⅶ

ICU の 回 想

— 新しい大学の建設 1949年-1966年 —

著　者　モーリス・E・トロイヤー
発行日　1995年3月20日
発行者　国際基督教大学広報課
　ICU50年史編纂室
　東京都三鷹市大沢3－10－2
印刷所　株式会社 三幸印刷
　東京都武蔵野市境3－1－10